石見銀山遺跡石造物調査報告書 9

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地

平成21（2009）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県教育委員会では、石見銀山遺跡の解明を目的に平成８年度から大田市（旧温泉津町、仁摩町を含む）とともに、発掘調査・文献調査・科学調査などを含む総合調査を実施してきました。

これらの調査により、石見銀山における銀生産は日本のみならず東アジアの政治・経済に大きな影響を与え、東アジアとヨーロッパとの文化的交流にも大きく貢献したことが明らかとなってきました。

このような成果を基に、日本政府は平成18年１月に国連教育科学文化機関の世界遺産センターへ石見銀山遺跡の世界遺産登録推薦書を正式に提出し、平成19年７月に世界遺産委員会での審議の結果、「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産リストへの記載が決定されました。

石見銀山遺跡の世界遺産としての価値は認められましたが、まだまだ未解明の部分が残っているのも事実です。そのため現在も調査は継続されており、今年度も発掘調査をはじめ各種の調査が行われてきました。

本書はそのうち、石造物調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、江戸時代初期から近代までの石造物が確認され、温泉津地区における石造物のあり方を知る上での新たな資料を得ることができました。また、石見銀山で広く使われている福光石の流通に関する資料も発見されました。

この調査に際しまして、ご協力いただきました西念寺および地元の方々など関係者のみなさまに心からお礼申し上げるとともに、本書が今後の調査研究及び整備活用等の基礎的な資料として活用されれば幸いに存じます。

平成21年３月

島根県教育委員会

教育長　藤　原　義　光

例　　言

1．本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2．調査した場所は以下のとおりである。

平成20年度　　西念寺墓地（大田市温泉津町）
平成19年度　　安原備中墓（大田市大森町）
平成13年度　　大光寺墓地（飯石郡飯南町）

3．調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査活用委員会

町田　　章（前奈良文化財研究所所長）
井上　雅仁（島根県立三瓶自然館学芸 GL）
大橋　泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　　昭（元島根県教育委員会教育次長）
黒田　乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）
小林　准士（島根大学法文学部准教授）
高安　克己（島根大学副学長）
田中　裕子（オフィスタナカ代表）
中塩　　弘（DOWA ホールディングス株式会社執行役員）
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
中村　俊郎（中村ブレイス株式会社代表取締役社長）
西村　幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）
林　　秀司（島根県立大学准教授）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上　　隆（京都国立博物館学芸部保存修理指導室長）

事務局（平成20年度）

卜部　吉博（文化財課長）
大矢　敬子（文化財課世界遺産室長）
佐々木慎二（同主幹）
守岡　正司（同専門研究員）
目次　謙一（同主任研究員）
中木紗友美（同嘱託）
佐藤　正範（同文化財 GL）
椿　　真治（同室専門研究員）
引野　佳幸（同企画員）
和田　守弘（同主任）
田原　淳史（同文化財保護主任）

石造物調査指導者

田中　義昭（島根県文化財保護審議会委員）

池上　　悟（立正大学文学部教授）
宮本　徳昭（石造物調査員）

調査参加者

現地調査

（石造物調査指導者）	田中　義昭	池上　　悟	宮本　徳昭		
（島根県教育委員会）	椿　　真治	守岡　正司	目次　謙一	田原　淳史	
	中木紗友美				
（大田市教育委員会）	長嶺　康典（大田市石見銀山課遺跡調査係長）				
	新川　　隆（同調査補助員）				
	尾村　　勝（同調査補助員）				
	松尾　賢二（同調査補助員）				
（立正大学考古学研究室）	村山　　卓	中野　光将			
（資料整理）	高村　玲子	浅野　美貴	井上　伸子	松原　絵麻	

4．調査においては下記の方々から多くのご協力・ご指導を頂いた。記して謝意を表したい。
山崎　益身（西念寺住職）、村上慶一郎、今岡　利江
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
鳥谷　芳雄（島根県立古代出雲歴史博物館専門研究員）
岡　　宏三（島根県立古代出雲歴史博物館専門研究員）

5．実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センターにおいて保管している。

6．本書の執筆は目次に明記した。

石見銀山遺跡の石造物調査において、ご指導をいただいておりました宮本徳昭氏が平成20年７月26日に急逝されました。ここに、ご冥福をお祈りいたします。

本　文　目　次

第１章　石造物調査の目的・対象・経緯……1
第２章　石見銀山遺跡と温泉津の歴史
　第１節　温泉津の歴史……（新川）3
　第２節　温泉津の寺社……（中木）5
第３章　西念寺墓地の調査（３）
　第１節　西念寺の概要……（長嶺）9
　第２節　調査の経過……（守岡）11
　第３節　確認された石造物の概要……（田原）11
　第４節　墓地と石造物の概要……（池上・守岡）14
　第５節　まとめ……（池上・守岡）29
　第６節　総　括……（田中）31
第４章　安原備中墓……（田原）33
第５章　大光寺墓地の宝篋印塔群……（鳥谷）35

挿　図　目　次

第１図　石見銀山遺跡の範囲
第２図　温泉津の主な寺社
第３図　温泉津地区石造物分布図
第４図　群番号20　墓地配置図
第５図　西念寺周辺地形図・墓地配置図
第６図　西念寺の石造物
第７図　14号窟・15号窟実測図
第８図　14号窟・15号窟石造物・陶器実測図
第９図　16号窟・石造物実測図
第10図　17号窟・石造物実測図
第11図　群番号５　石造物実測図（１）
第12図　群番号５　石造物実測図（２）
第13図　群番号20　石造物実測図
第14図　益田屋　石造物配置図
第15図　益田屋　石造物実測図（１）
第16図　益田屋　石造物実測図（２）
第17図　群番号５　岩窟配置図
第18図　石見銀山遺跡　安原備中墓位置図
第19図　安原備中墓所在の石造物
第20図　飯石郡飯南町大光寺墓地位置図
第21図　大光寺墓地の宝篋印塔群実測図

表　目　次

第１表　幕末期における寺社一覧
第２表　温泉津地区石造物分布調査の概要
第３表　墓石銘文一覧表

写真図版目次

図版１　西念寺墓地14号窟
　　西念寺墓地15号窟
図版２　西念寺墓地16号窟
　　西念寺墓地17号窟
図版３　西念寺墓地益田屋墓所
　　西念寺墓地益田屋墓所
図版４　西念寺墓地益田屋墓所
　　西念寺墓地益田屋墓所
図版５　西念寺墓地群番号５
　　西念寺墓地群番号20
図版６　西念寺墓地石造物・沖泊街道
図版７　安原備中墓石造物
図版８　安原備中墓石造物
図版９　大光寺墓地石造物
図版10　大光寺墓地石造物

第１章　石造物調査の目的・対象・経緯

１．調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世)、さらには近代へと長期にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山にいたるまでに、繁栄期・停滞期・衰退期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷を明らかにすることにより、それに資することを目的として実施している。

２．調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の４つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）がより直接的に反映されていると考えられるとの理由から、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとした。

３．調査の経緯

石造物調査（墓石）は島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和59～61年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことがその始まりである。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進められたが、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るため分布調査。

②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するために詳細な悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満

たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵珖寺、西念寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。

なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物群保存対策調査や港湾調査、街道調査のおりに実施されている。

（註）

1 島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』1987

2 島根県教育委員会　他「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊　1999年

3 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書1－妙正寺―』2001

4 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書2－龍昌寺跡―』2002

5 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書3－安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』2003

6 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書4－長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家）―』2004

7 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書5－分布調査と墓石調査の成果―』2005

7 温泉津町教育委員会『温泉津―伝統的建造物群保存対策調査報告書―』　1999

8 島根県教育委員会他『石見銀山遺跡総合調査報告書第6冊』　1999

9 島根県教育委員会『石見銀山街道―鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書―』　2004

10 島根県教育委員会『石見銀山街道―鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告―』　2005

第２章 石見銀山遺跡と温泉津の歴史

第１節　温泉津の歴史

石見銀山の歴史は大永年間、博多の豪商神屋寿禎による発見・開発によって始まる。温泉津湊はその外港として、戦国時代以降大きく発展した。

「温泉」の地名については、平安時代の『和名類聚抄』にすでに「温泉郷」の文字が見え、温泉津を含む一帯が比定されているが、湊の歴史としては13世紀末、近郊に大家荘が成立した頃に始まるという。その後、温泉津を含む温泉郷は櫛島の櫛山城を拠点とする温泉氏により支配されたとされるが、その実態については明確ではない。

銀山開発初期の銀積み出し港は、仁摩の鞆ヶ浦、古柳などとされ、当初は温泉津は主要港ではなかったと言われている。しかし、温泉津沖泊に所在する恵比須神社は16世紀代に遡る古建築であることが明らかとなり、建立が、大永６（1526）年と伝えられることから、銀山開発初期段階ではすでに港湾施設として機能していたことが指摘されている。

温泉津が港湾施設として資料等で確認できるのは、毛利氏が石見に進出し、石見支配の拠点の一つとしてからと言われる。

具体的には永禄４（1561）年、毛利元就が石見銀山の攻防及び、尼子氏攻略のため温泉津に吉川元春を進駐させ、銀山への兵糧運搬の準備をさせたことに始まり、次の年には石見銀山を完全掌握している。その後、銀山地内と温泉津には奉行人が配置されており、温泉津にはさらに永禄13（1570）年頃に鵜丸城を築城している。毛利氏は、温泉津沖泊の港湾機能の高さを重視し、温泉津・沖泊を一体的に整備しており、湾の入り口には鵜丸城の他に櫛山城、笹山城を配し、防御を固めている。

毛利氏による支配は、豊臣氏との銀山の共同管理時期を含め慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いまで続き、この間、港湾施設としての基礎が整備され、銀の積み出し港、物資の搬入搬出の主要港として位置付けられている。また、軍事的・政治的拠点としての機能も強化され、毛利氏の重要拠点の一つとして港湾都市へと発展している。これと共に、銀山から降路坂を越え、西田を経て温泉津・沖泊へ至るいわゆる温泉津沖泊道も整備され、銀山への物資の大量輸送が温泉津を中継基地として行われるようになる。

石見銀山は関ヶ原の戦い後、いち早く徳川氏の直轄地となり、11月には徳川氏の代官頭である大久保長安が石見に着任し、翌慶長６（1601）年に初代銀山奉行となっている。この大久保長安の施策でも、温泉津は重要拠点と位置付けられ、さらに整備が進められる。銀の搬出こそ海上輸送の危険性から慶長９（1604）年には尾道まで陸送されるルートに変更されるが、その後も温泉津は銀山の物資の搬入・搬出港として重要な位置を占めており、慶長10（1605）年には、銀山と共に「地銭免除」の特権が与えられ、町場作りに一層力が入れられている。その結果、温泉津居住者も増大し、すでに毛利氏の支配下で出現していた問屋の数も増え、大消費地である銀山の外港として更なる発展をとげることとなる。実際慶長10（1605）年からの１年間だけで、益田・三隅から運ばれた灰吹き用の木炭の陸揚げが、14,000表にものぼっている。こうした物資は温泉津から温泉津沖泊道を通って、牛馬で銀山まで運搬されている。

銀山の最盛期は慶長年間から寛永年間と言われ、この時期の産銀は年産40トンを超えている。その後産銀量の低下に伴い、銀山が徐々に衰退していくのとは異なり、温泉津では寛文12（1672）年以降、日本海西廻り航路の開拓・展開により、その寄港地となり、さらに北前船の出現と活躍によって、日本海航路の重要な寄港地としても急速に整備されていくことになる。町には北前船の物資を扱う問屋や商家が立ち並び、延享２（1745）年に

は狭い温泉津の町中に40軒の問屋を数えるまでになっている。それぞれの問屋は取り扱う廻船が定められており「加賀屋」「越前屋」「越後屋」「丹後屋」など廻船の本拠地の国名を屋号とする問屋も多かった。しかし、問屋の数が増え、各問屋間の競争が激化すると、「抜け駆け」事件も起こるようになり、船表番所の申し渡しなど、問屋仲間の取り締まりも強化されるような事態となっている。

このように廻船が増加し、物流が活発になると、この流通システムに組み込まれる地場産業も開発・展開していく。温泉津では「温泉津丸物」という陶器生産が始まり、「はんど」と呼ばれる甕を主要製品とした日用雑器が商品として北前船ルートにのって19世紀中頃から大量に流通する。これらの日用雑器は「石見焼」と言われ遠方まで運ばれたが、当然地元の銀山にも流通しており、銀山を発掘調査すると近世から近代の層でこの石見焼が数多く出土している。

温泉津の特産品はこの他に瓦、福光石、石見半紙などが知られ、これらも北前船の寄港によって広く買積されていく。

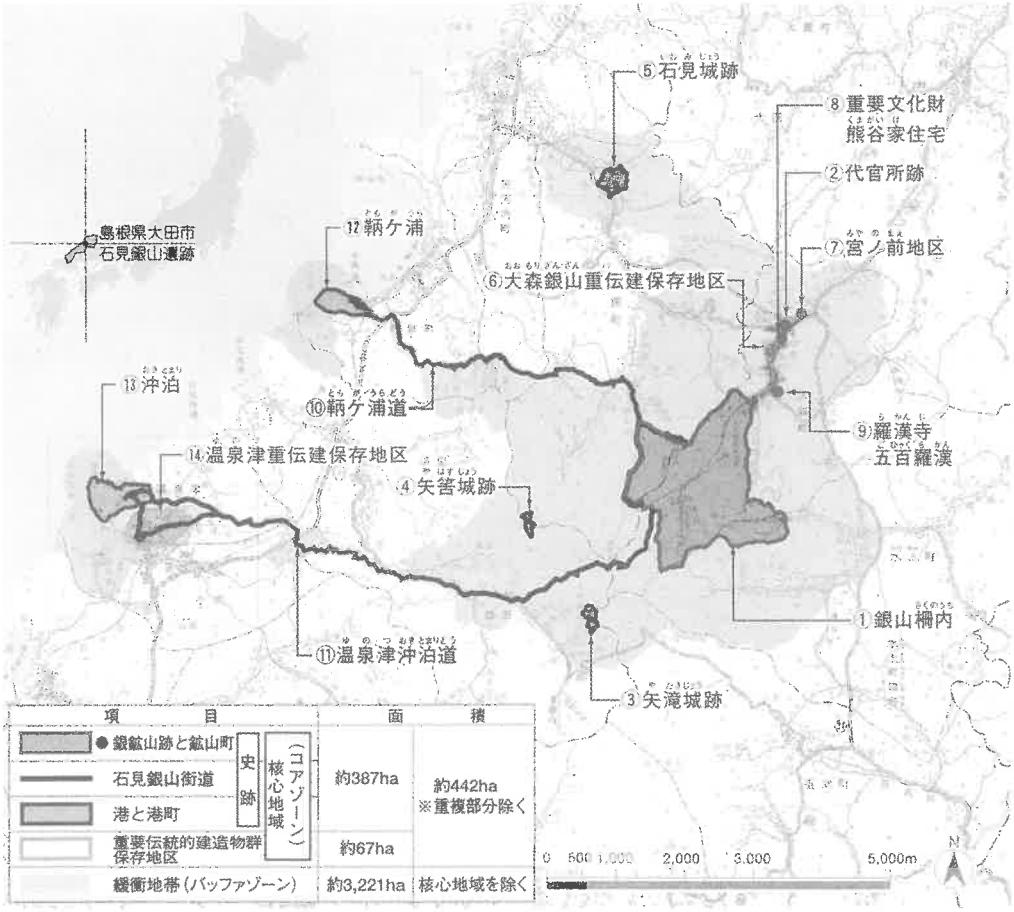
このように、活況を呈した温泉津であるが、明治維新となり、近代化が進み、船も西洋式船舶の導入、鉄道の敷設など、流通にも近代化が訪れると、従来の北前船は衰退していく。温泉津の問屋も従来の問屋業が成り立たなくなり、このため一時40軒を数えた廻船問屋も小売業や旅館業に事業形態を変え、急速に姿を消してゆくことになる。こうして明治以降、温泉津の町は新たな展開へと移行してゆくのである。

参考文献

温泉津町『温泉津町誌上巻・中巻』1994・95

島根県教育委員会『石見銀山街道　鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』　2004

温泉津町『1999　温泉津』



第１図　石見銀山遺跡の範囲

第2節　温泉津の寺社

石見銀山の外港としての温泉津湊は、戦国大名の争奪戦の対象となるが、永禄5（1562）年には毛利氏に制定され、流通の拠点としても町場の経済的機能が重視されるようになった。現在、温泉津地域（重要伝統的建造物群保存地区内）には8ヶ所の寺社がある[①]が、それらの多くは中世後期の創建や、改宗・再興という起源を持っており、当然、その後温泉津地域を支配した毛利氏と関わりがあったと考えられる。

中でも西念寺は開祖然休がその師の三休（波根長福寺主）とともに毛利元就の九州攻めに御伽衆として同行し、後々まで毛利氏の加護を受けた。また、西楽寺は真宗寺院として天正4（1576）年の石山合戦に参戦しているが、この時期は毛利氏が石山本願寺と協調して織田信長に対抗していた時期にあたっている。両寺とも毛利輝元から諸役免除を受けており、当地の無縁所としても機能していたとされる[②]。

毛利氏と関わりの深い寺院としてほかに禅宗海蔵寺がある。海蔵寺は現在の法泉町の谷の奥にあったとされ[③]、毛利氏と尼子氏の銀山争奪戦において、永禄元（1558）年尼子氏に降伏した毛利方武将、山吹城主の刺賀長信が家臣高畑遠言とともに切腹したとされる寺院である。以後、海蔵寺は毛利氏と深く関わりを持ち、慶長9（1604）年、毛利輝元の要請によって毛利氏の萩移転とともに寺も萩へ移り、海潮寺と改称したという[④]。近世期にも海蔵寺（史料によっては海蔵庵）が存在しているが（第1表）、これも中世の海蔵寺との関連で建立された寺と推測できるだろう。

近世に入ると村明細帳[⑤]が作成されるようになり、寺社数も記録されている。それによれば、温泉津村では近世を通じてだいたい社3ヶ所、寺6ヶ所、庵4～5ヶ所、そして愛宕社という構成になっていた。これらは上述した毛利氏支配時期にすでに創建され、近世初頭には大久保長安から諸役免除を得ている寺社を中心に構成されている。さらに、幕末期の慶応3（1867）年にはこれらの寺社の他、近世に入って建立されたものや他の寺院に付随して建立されたものも含めて記した寺社書上帳[⑥]が作成されており、より詳細な様子がわかる（第1表）。

なお、愛宕社は村明細帳では愛宕堂と記され、神社とも寺院とも別の扱いで、「朝暮鐘つき堂」と注記されている。これは愛宕社が当時の人々にとって特別な存在であり、より人々に密着した存在だったことを示すものだろう。

---

① 『温泉津町誌　下巻』「第九章第一節　個別社寺誌」による。

② 小林俊二「中世末の国際都市温泉津の成立」（『郷土石見』№34、1993）他。西楽寺の前身は正恩庵であったとされ（『温泉津町誌』他）、正恩庵宛の毛利輝元判物が西楽寺に残されている。また、西楽寺、西念寺のほか、小浜の西福寺も無縁所だったとされる。無縁所と戦国大名との関係については『温泉津町誌　下巻』「第四章第三節　津泊都市温泉津の無縁所」に詳しい。

③ 海蔵寺末寺の草庵が現在の西念寺の前身と言われている。（西念寺蔵の古記録による）

④ 『石見六郡社寺誌』（小林俊二編、石見地方未刊資料刊行会）

⑤ 木津屋文書や『温泉津町誌　資料編』所収の温泉津村明細帳を参考にした。村明細帳は村ごとに人口や家数、生業、役銀等を記して役所へ提出したもので、温泉津村では延享4年（1747）分を始め、8冊の村明細帳が確認されている。

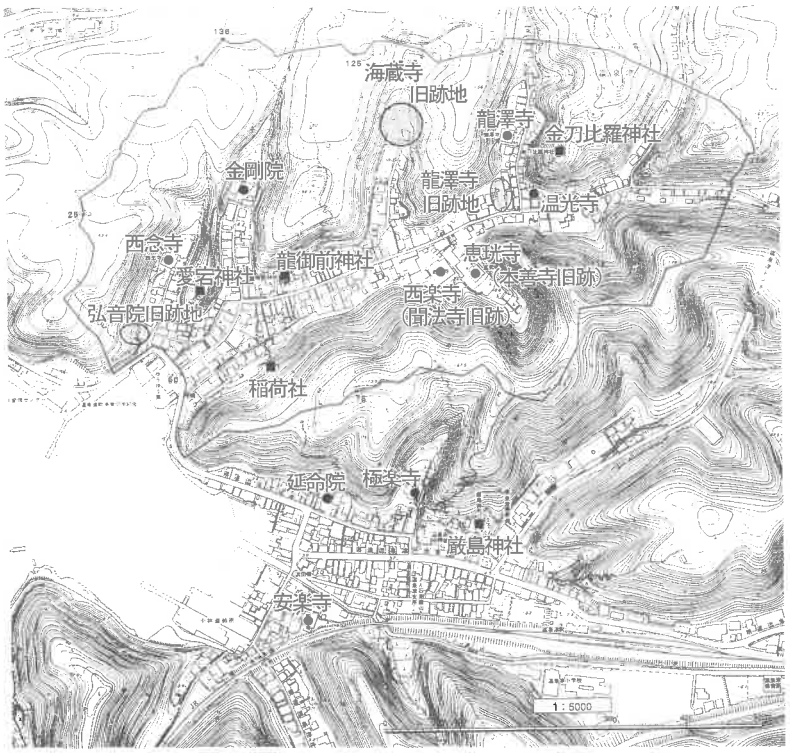
⑥ 木津屋文書（大田市教育委員会所蔵）。ただし、近世における温泉津村は、温泉津町と沖泊、日祖、日村によって構成されるため、この史料中の寺社も温泉津町域以外に存在するものが含まれていると考えられる。

第１表　幕末期における寺社一覧（慶応３年　寺社書上帳より作成）

※1	寺社名	宗派・本末関係	境内地御免除	備　　考	起源他　※2
社	龍御前社		慶長年間		中世期か
社	恵比寿社		慶長年間		
社	稲荷社		慶長年間		慶長10年（1605）社殿建立
	金比羅社			村入会草山にあり	文政５年（1822）
	恵比寿社			岩の上に勧請	（沖泊ヵ）
	大元社			村持草山内の神森にあり	
	大年社			草山傍にあり	
◎	愛宕社		慶長年間	往古より朝暮に鐘突き	永禄元年（1558）
	三宝荒神			西念寺山林境内にあり	
寺	西楽寺	京都西本願寺末浄土真宗	元亀３年及び慶長年間		もとは禅宗寺院、大永元年（1521）真宗に改宗
庵	聞法寺	西楽寺末		西楽寺境内にあり	慶安（1648～51）頃ヵ
寺	恵珎寺	京都妙顕寺末法華宗	往古より除地及慶長８年		大永３年（1523）
寺	本善寺	恵珎寺末		恵珎寺境内にあり	元文５年（1740）
寺	西念寺	京都浄顕院末浄土宗	元亀年間及び慶長年間		永禄４年（1561）
庵	弘音院	西念寺末		西念寺境内にあり	
庵	正念寺	西念寺末			（沖泊）
庵	法泉庵	西念寺末			
寺	龍澤寺	銀山町極楽寺末浄土宗	慶長年間		天正３年（1575）、大正11年（1922）現在地へ移転
	庵	龍沢寺持		村持地にあり	
寺	金剛院	紀州高野山正智院末真言宗	慶長年間		延元２年（1337）
	地蔵堂				
	（岩窟）	千手観世音菩薩		西浜地岩穴に安置	
庵	海蔵寺	長州萩海潮寺末之波積本郷福城寺末禅宗			
	善一郎持寺	浄土真宗西楽寺より勤来	永禄３年及び慶長年間	温泉持主善一郎持	室町時代末期

※１　明細帳で社（３ヶ所）・寺（６～７ヶ所）・庵（４～５ヶ所）として挙げられている寺社と愛宕社。
ただし、法泉庵は19世紀以降の明細帳のみ記され、庵の内に入れられていた聞法寺は19世紀半ばより寺の一つに数えられている。

※２　『温泉津町誌　下巻』『温泉津1999　重要伝統的建造物群保存地区調査報告』をもとにした。



第２図　温泉津の主な寺社（黒丸：寺院、黒角：神社）

弘音院旧跡地は「元禄五申年町屋敷絵図（写）」（多田氏蔵）による

第３図　温泉津地区石造物分布図

第２表　温泉津地区石造物分布調査の概要（温泉津・小浜）

仮番号	群	寺院との関係	上限	下限	概数	墓塔系					墓標系	その他		備　考
						一宝	一五	組宝	組五	無縫塔		地蔵	その他	
	1	恵珖寺			388						388			H17調査
	2	西楽寺	宝暦８(1758)	平成	(250)						(250)			
	3	西念寺			192			9	3		159	21		
	4	西念寺			570	1	1	14		42	2	510		H18・19調査
	5	西念寺	慶長18(1613)	大正	48		2	5		3	24	14	光背形２・その他６	
	6	金剛院	元和３(1617)		50		3	1	2	8	30	6		
	7	龍澤寺	享保13(1728)		19					9		10		
	8	龍澤寺			190						(180)	5	灯籠５	
	9	極楽寺			678	8	9	14	5	28	570	44		小浜地区
23	10	(極楽寺)	天保		68			1			(65)	1	陶製墓標１	
24	11	延命院			6			1				5		小浜地区
22	12				2							2		小浜地区
1	13				6							6		
2	14				2			1			1			
3	15		慶長18(1613)		2				(2)					大久保長安逆修塔
19	16				30							30		
8	17	(Ｈ屋)(Ｙ屋)	文化	明治	40						(40)		(花崗岩系墓石１)	
7	18		天保(1838)		3			1				2		報告書－36
6	19	(Ｎ屋)			10						(10)			
5	20		元禄13(1700)	明治	13	1		5		1	6		(花崗岩製墓石１)	報告書－25，27
9	21				12						12			
10	22		寛政11(1799)	明治	57		2	10			45			報告書－38
12	23		明治13	昭和	8						8			
13	24				29						29			
14	25				3				1		2			
15	26	海蔵寺跡		(大正)	22				1		20	1		
16	27	海蔵寺跡			10						3	6	陶製墓標１	
17	28	(Ｋ屋)(Ｉ屋)	嘉永３(1850)		61			1			60			コンクリート塗装
18	29				6							5	石碑１	報告書－22
	30				130			(3)		(1)	120	6		報告書－31
	31				16		1	1			14			報告書－30
	32				3			3						報告書－29
	33	龍御前神社			7								灯籠６・鳥居１	
	34				8	2	1	5						報告書－32
	35				4							4		小浜地区
新１	36	延命院	宝暦３(1753)		59	1		1		8	44	1	陶製2・線香立て1その他１	
新２	37	庵寺	天明４(1784)		355	3	2	3			341	6		
新３	38		天保８(1837)	明治	15						15			
新４	39		天保９(1838)		90	6		14	2	3	65			

※年代・数は確認できたもの

第３章　西念寺墓地の調査（３）

第１節　西念寺の概要

西念寺は、大田市温泉津町温泉津イ787番地、沖浦の小路の最奥に所在する、浄土宗の寺院である。

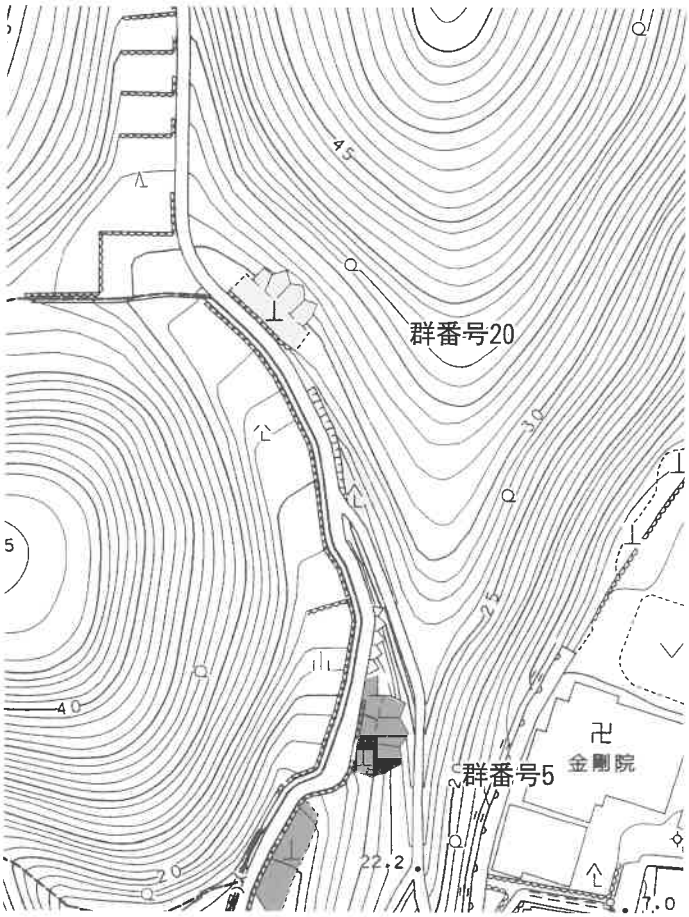
その創建は、寺所蔵の『天正十三年　西念寺然休陳状案』や寺伝によると、石見銀山の極楽寺が温泉津に草庵を結んだことに起源をもつものの、僧　然休が温泉津に入り寺が開基されたとされる永禄４（1561）年のことと考えられる。

現在の境内地は、当初３間×２間の質素な建物であったものを、然休が屋敷地を貰い受け大伽藍を建立した時のものではないかと推測されている。境内には、南に面して薬医門形式の表門、西に本堂、北に庫裡が配置され、表門の東には経蔵、西には地蔵堂（享和３（1803）年、14世義山の代の建立）があり、本堂南西の山腹のやや高台には鐘楼堂も建てられている。また、本堂と庫裡の間に書院、庫裡の北西に居室が設けられ、これらに囲まれた一画に池を掘り山腹を背景とした庭も造られている。この庭には毛利時代に植えられたという梅の老木が今も残り、開基時の龍灯松とともに創建当時の姿を偲ばせている。

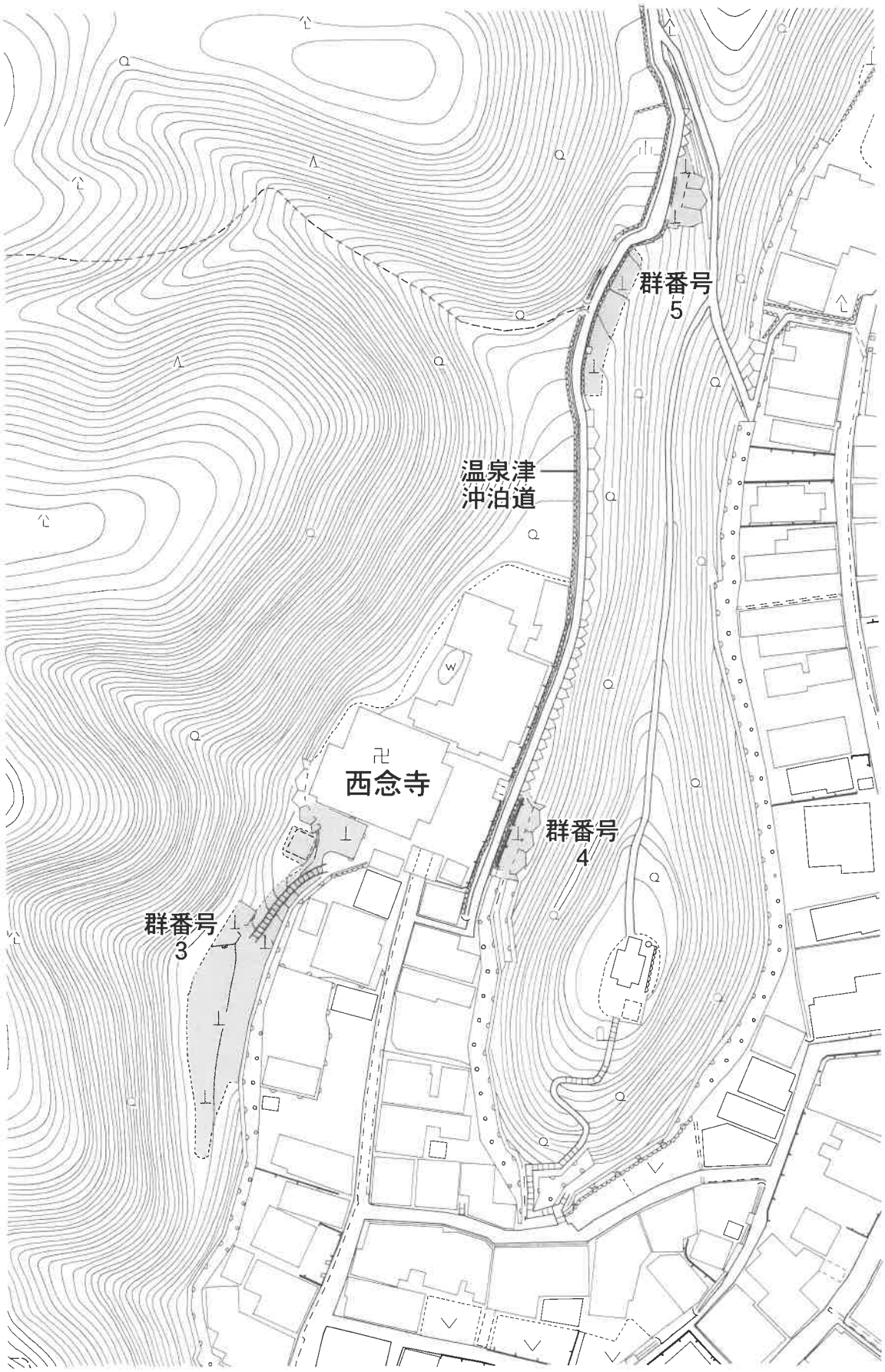
参考文献

温泉津町教育委員会『1999　温泉津　－伝統的建造物群保存対策調査報告書－』1999

温泉津町誌編さん委員会『温泉津町誌　下巻』1995



第４図　群番号20　墓地配置図（Ｓ＝1/1000）



第５図　西念寺周辺地形図・墓地配置図（Ｓ＝1/1000）

第２節　調査の経過

平成18年度からは悉皆調査の対象を西念寺墓地とし実測調査を行っている。

平成18年度は境内の東側、沖泊へ続く街道に面した墓地を調査した。

墓地は垂直に切り立った岩盤を加工して作られた岩窟とその前面に造成された平坦面からなる。調査は石造物分布図の群番号４及び群番号５の一部を行った。群番号４では１～３号窟、群番号５では４号窟（伝松浦家墓所）が対象である。

岩窟内の置かれた石造物は保存状態が良いものが多かった。4号窟ではこの地域では類例が少ない光背形墓標が確認された。報告点数は72点である。

平成19年度は境内東側の群４及び本堂南側の墓地を調査した。群4では平成18年度の調査した群４の１～３号窟に隣接した歴代住持墓地を、境内南側では高津屋墓地及び岩窟墓地を対象とした。高津屋墓地では過去帳との照合作業が初めて実施され、多大な成果が得られた。岩窟墓地は５～13号窟を調査した。温泉津地区寺院墓地を特徴づける形態で、石造物は岩窟規模に制約を受け高さが低い。その他、境内にある石殿も調査した。石殿には西国三十三観音霊場の寺院銘と施主銘が刻まれていた。

平成20年度の調査は６月２日の石造物調査指導会において、古相の墓石が確認されている境内北側の墓地及び境内にある益田屋墓所を対象として実施する方針が決められた。境内北側では時間的制約から沖泊への街道に面する群５、群20のみを実施することとした。調査は８月以降に実施した。途中８月26日～８月28日には立正大学池上悟教授及び学生にも参加していただき、調査の効率化を図った。

その後、資料整理を行い、報告書作成を行った。

参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書７－温泉津地区の分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)―』2007

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書８－温泉津地区の分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)―』2008

第３節　確認された石造物の概要

西念寺における３度の調査において、その概要が把握された石造物の数自体は多くはないが、いくつかの形式の存在を確認することができた。ここでは、各墓石の様相について記す前に、西念寺墓地において確認できた形式について、その概要を記すこととしたい。

一石宝篋印塔

方柱状の石材を、上から相輪・笠・塔身・基礎と加工して造作された墓塔である。これまでの調査で石見銀山においては、この形式が中世末期から近世初頭に主体を占めることが明らかとなっているが、西念寺墓地においては、境内東側の墓所（群番号４）２号窟の中で一基確認されたのみである。

一石五輪塔

一石宝篋印塔と同様、方柱状の石材を加工するもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪が造作されている。やはり境内東側の墓所２号窟や群番号５・20において確認されている。

組合せ宝篋印塔

塔を構成する相輪・笠・塔身・基礎がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。その特性ゆえに本来の組み合わせを維持しているものは多くないため、実数の把握は難しいが、30基前後あると判断

される。境内東側の墓所2号窟のほか北側墓所（群番号5・20）などで確認されている。

組合せ五輪塔

塔を構成する空輪・風輪・火輪・水輪・地輪がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。境内南側墓所において2基が確認されている。

無縫塔

円柱状石材の先端部を尖らせ、下部を窄ませるように造作した部分と、円形及び方形の台座からなるものである。僧侶階層の墓塔として採用されたもので、西念寺においても歴代住職の墓所として造成されたと判断される境内東・北側墓所において確認されている。

円頂方形墓標

縦長の本体の頂部が丸く加工されたもので、本体の厚さに対して幅が上回る形態の墓標である。各墓所において確認される。

突頂方柱墓標

方柱状の本体上部が丸みを持って突出する形態の墓標である。境内南側の墓所において確認されるが、今回の調査では基本的に調査の対象外とした。

平頂方柱墓標

方柱状の本体上部が平らな形態の墓標である。境内南側の墓所において多数確認されるが、今回の調査では突頂方柱墓標と同様、基本的に調査の対象外とした。

光背形墓標

縦長の本体の頂部が尖り、上部幅に対して下部幅が狭い形態の墓標である。境内西側墓所と北側墓所において僅かに3基が確認される。石見銀山遺跡及びその周辺を含めてこれまでほとんど確認されていない形態のものである。

尖頂方形墓標

縦長の本体の頂部が尖り、幅は下方がやや広い墓標ある。裏面は粗い加工が施されるのみである。花崗岩製で、現在、類例は確認できない。

笠付方形墓標

厚さに対して幅が上回る長方形状の本体に、別固体の材を笠状に造作したものを載せて完成する墓標である。境内南側墓所において2基が確認されている。なお、この2基のみが花崗岩製である。

地蔵

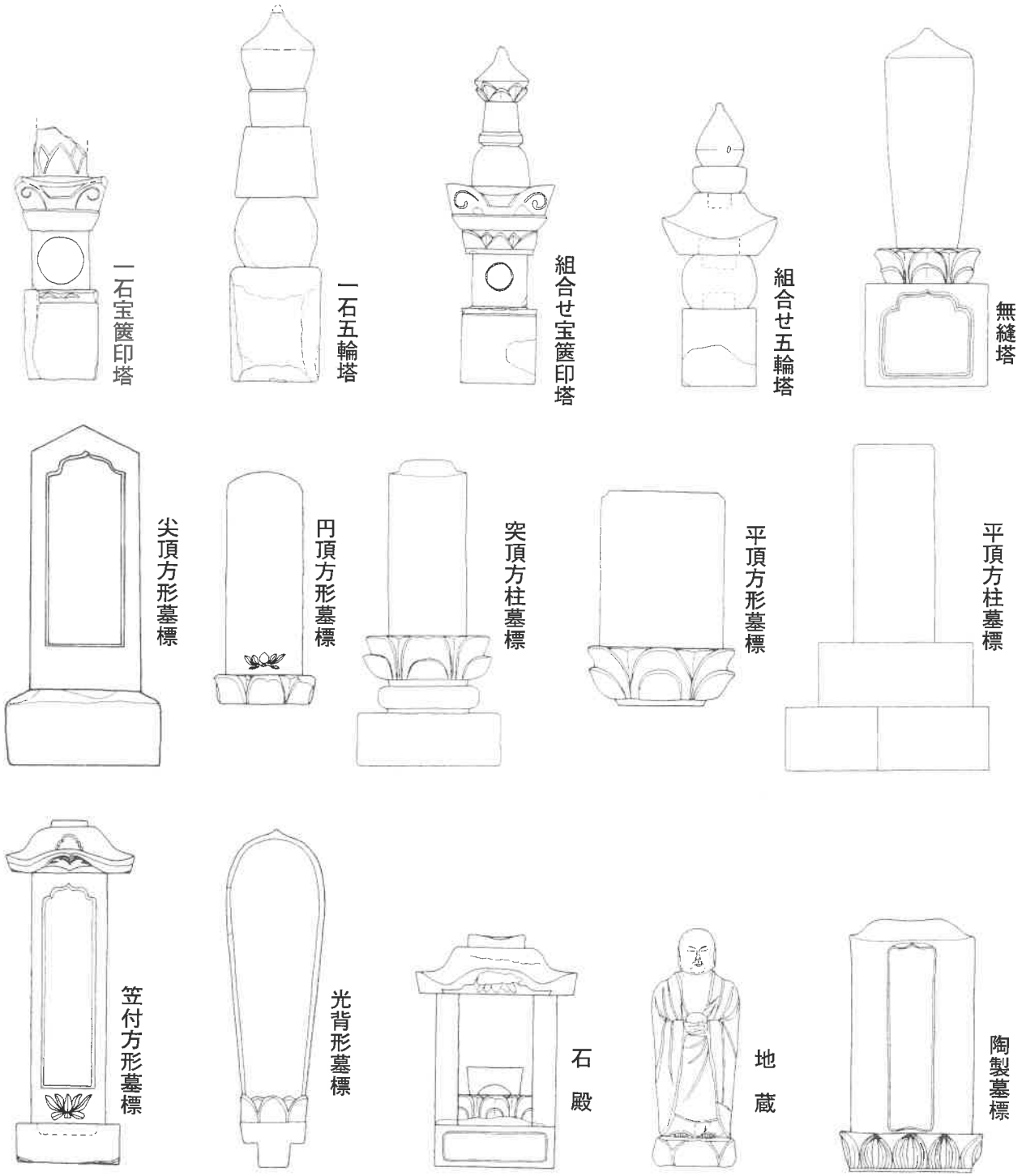
地蔵として造作したものである。境内東側墓所3号窟中からは、様々な像容の地蔵が約300基確認されている。各墓所に存在する。

石殿

板状の石材を組み合わせて壁を造り、観音開きの扉と屋根を伴うものである。

陶製墓標

陶製のものである。石見部で近世以降盛んに生産されている石見焼によると考えられるもので、数は多くないものの散見される。


一石宝篋印塔
一石五輪塔
組合せ宝篋印塔
組合せ五輪塔
無縫塔
尖頂方形墓標
円頂方形墓標
突頂方柱墓標
平頂方形墓標
平頂方柱墓標
笠付方形墓標
光背形墓標
石殿
地蔵
陶製墓標

第6図　西念寺の石造物

第４節　墓地と石造物の概要

西念寺本堂の東側に沖泊に続く道路が存在する。道路両側には石垣などを使用して造成した平坦面が残存している。

今年度調査した群番号５は道路から階段を設けて一段高い位置にある。その平坦面には平成18年度に調査した伝松浦家墓所（４号窟）がある。

群番号５は大きく三段に区画されている。下段は南北25m、東西５ｍの平坦面を形成し、道路から1.8ｍの高さにある。道路側は石垣で補強されている。垂直な斜面には４基（４・14・15・18号窟）の岩窟がある。14号窟・15号窟は４号窟の北側に、18号窟は４号窟の南側に位置し、同じ岩盤を加工している。15号窟前の平坦面には墓石が散在している。中段は道路側を石垣で補強し、道路から２ｍの高さに位置する。南北11m、東西５ｍの平坦面で、墓標２基、埋没した墓石２基（無縫塔１、円頂方柱墓標１）を確認できる。上段には２基（16・17号窟）の岩窟がある。岩窟の前にはほとんど平坦面はない。岩窟内には石仏14基、墓標２基が確認できる。

14号窟

14号窟は４号窟から北４ｍに位置する。垂直な岩盤を正面幅1.7m、奥行き1.2m、高さ1.4mの箱形に掘削している。壁は垂直であるが、天井は丸みを持つ。床面は奥側が約0.4m高く、奥行き0.6ｍの平坦面があり、そこに墓石が置かれている。

14号窟の内部には３基の石造物が並置されており、墓石に鐫刻された銘文から○○屋の墓所であることが判明する。

３基の墓石はいずれも頂部を丸く仕上げ、幅に対し奥行き（厚み）が短い「円頂方形墓標」である。石材については詳細な分析を実施していないが、福光石と考えられる石材を中心に使用されている。

３基の円頂方形墓標は、すべて二段の蓮華を表した台座の上に、墓標本体を設置している。保存状態はすべて良い。３基の墓標について中央の墓標の幅が広く、両側のものは同規格である。

中央の墓標幅は44.5 cm、両側は30 cm であり、高さは57～58 cm を測る。４、６は花立てで、幅13 cm、高さ24.5 cm の同規格である。側面は面取りされ、上面から円形の刳り込みがある。５は幅25 cm、高さ16 cm の線香立てが、幅34 cm、高さ８cm の台座の上にのる。線香立ての下面はＵ字形に穿たれている。

墓標の下方には蝋燭立てが置かれている。高さ34 cm、幅24.6 cm、奥行き16 cm を測る。断面が家形を呈し、中央は方形に穿たれている。

確認できる墓標銘文には、１には明治29（1896）年と明治36（1903）年、３には安政４（1857）年の紀年銘が確認できる。

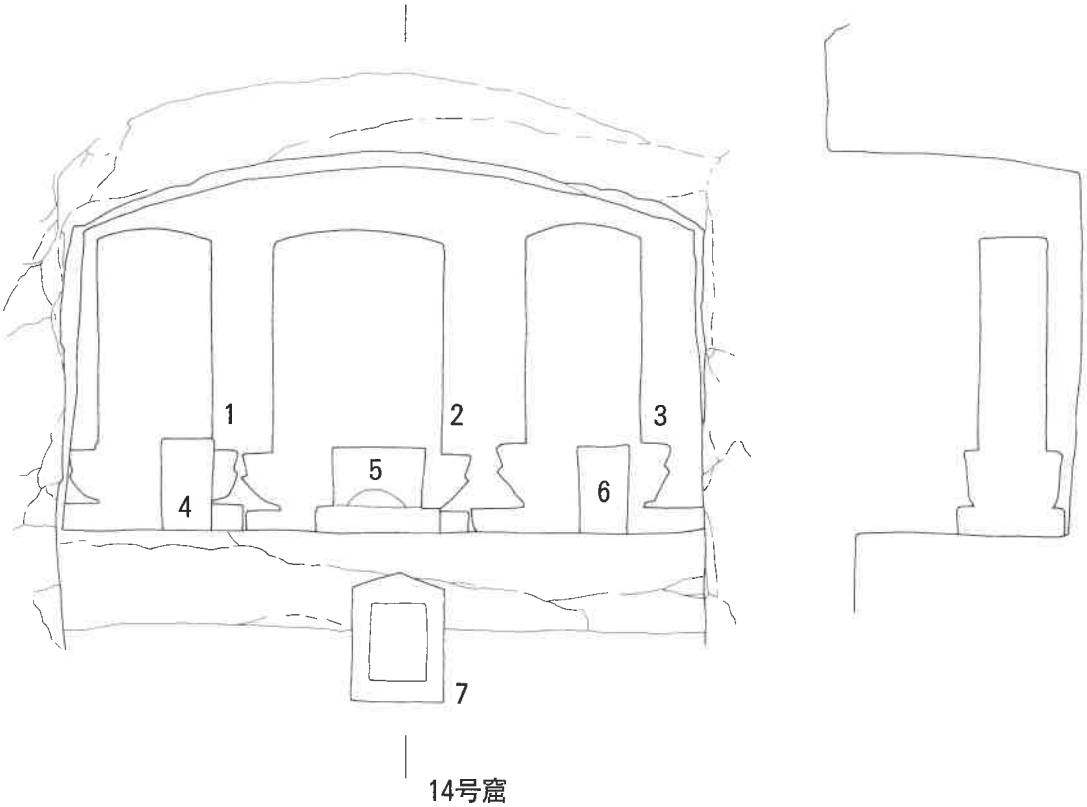
15号窟

15号窟は14号窟から北１ｍに位置する。垂直な岩盤を正面幅1.8m、奥行き1.2m、高さ1.35mの箱形に掘削している。壁は垂直であるが、天井は丸みを持つ。床面は奥側が約0.35m高く、奥行き0.5mの平坦面がある。その内部は方形に穿たれ、上には２枚の蓋石が残る。蓋石は49×89 cm、厚さ9 cm を測り、奥壁に向かって右手の蓋石は一箇所の角がＬ字形に加工されている。

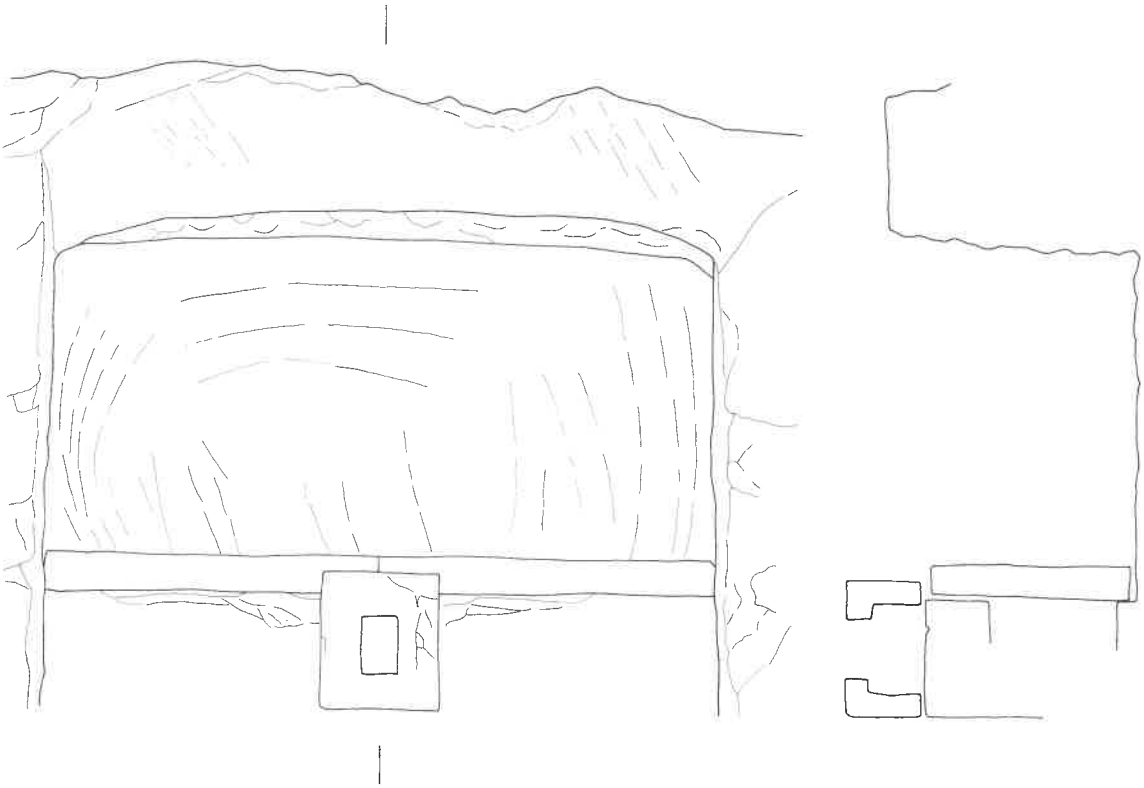
現在、岩窟には墓石はない。蓋石の上には陶器製の蝋燭立てが残る。黄色の釉薬が施され、地元の製品と考えられる。また、前方には幅32 cm、高さ38 cm、奥行き20 cm の石材を方形に掘り込んだ石造物が置かれている。住職の話によれば、昭和30年代に本堂周辺に改葬されたという。

16号窟

16号窟は15号窟から北10mに位置する。道路から岩盤を加工した幅の狭い階段をあがった場所にある。垂直な岩盤を正面幅2.1m、奥行き1.0mに掘り込む。現在、天井はなく、当初から存在しな



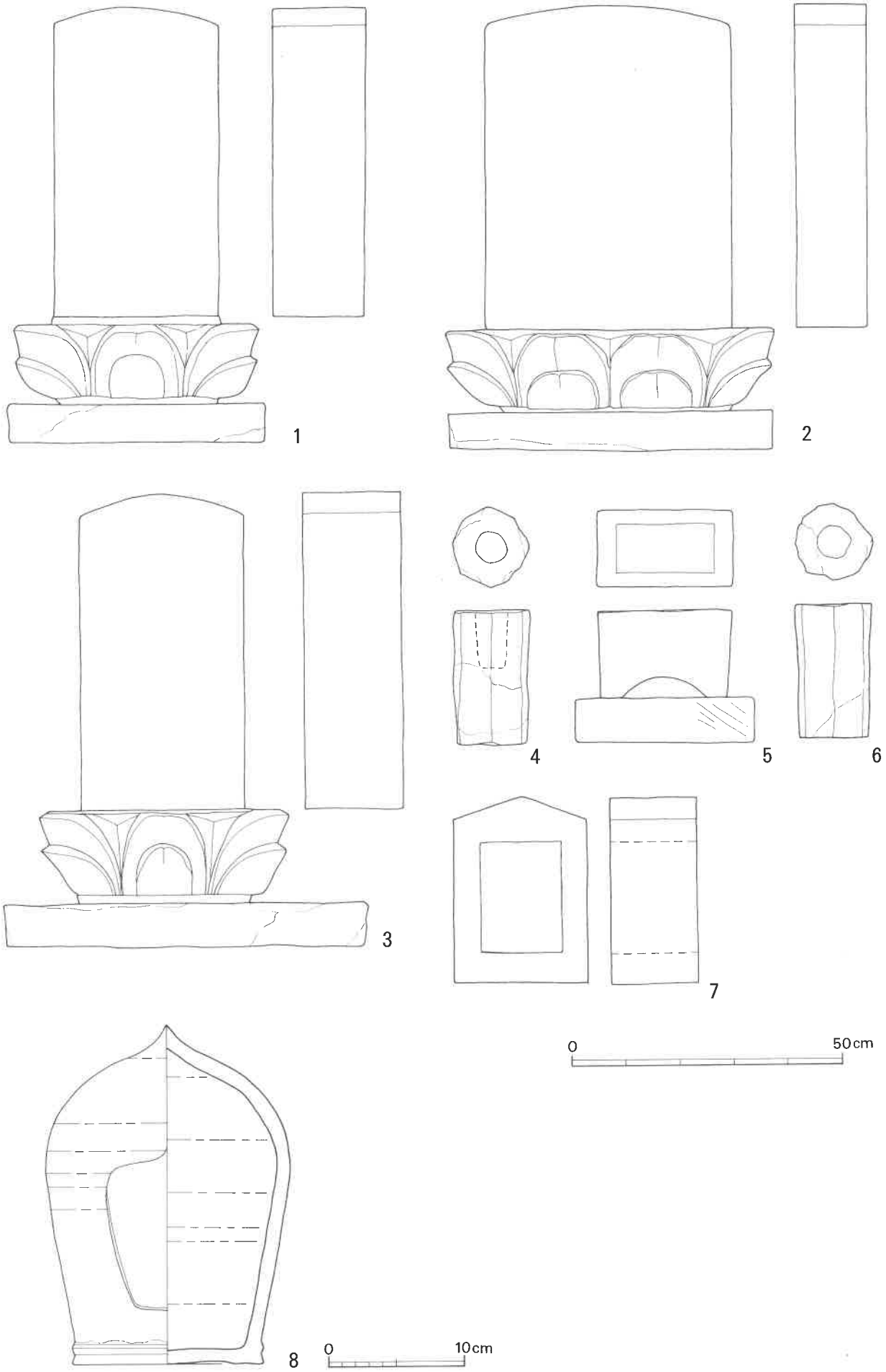
14号窟



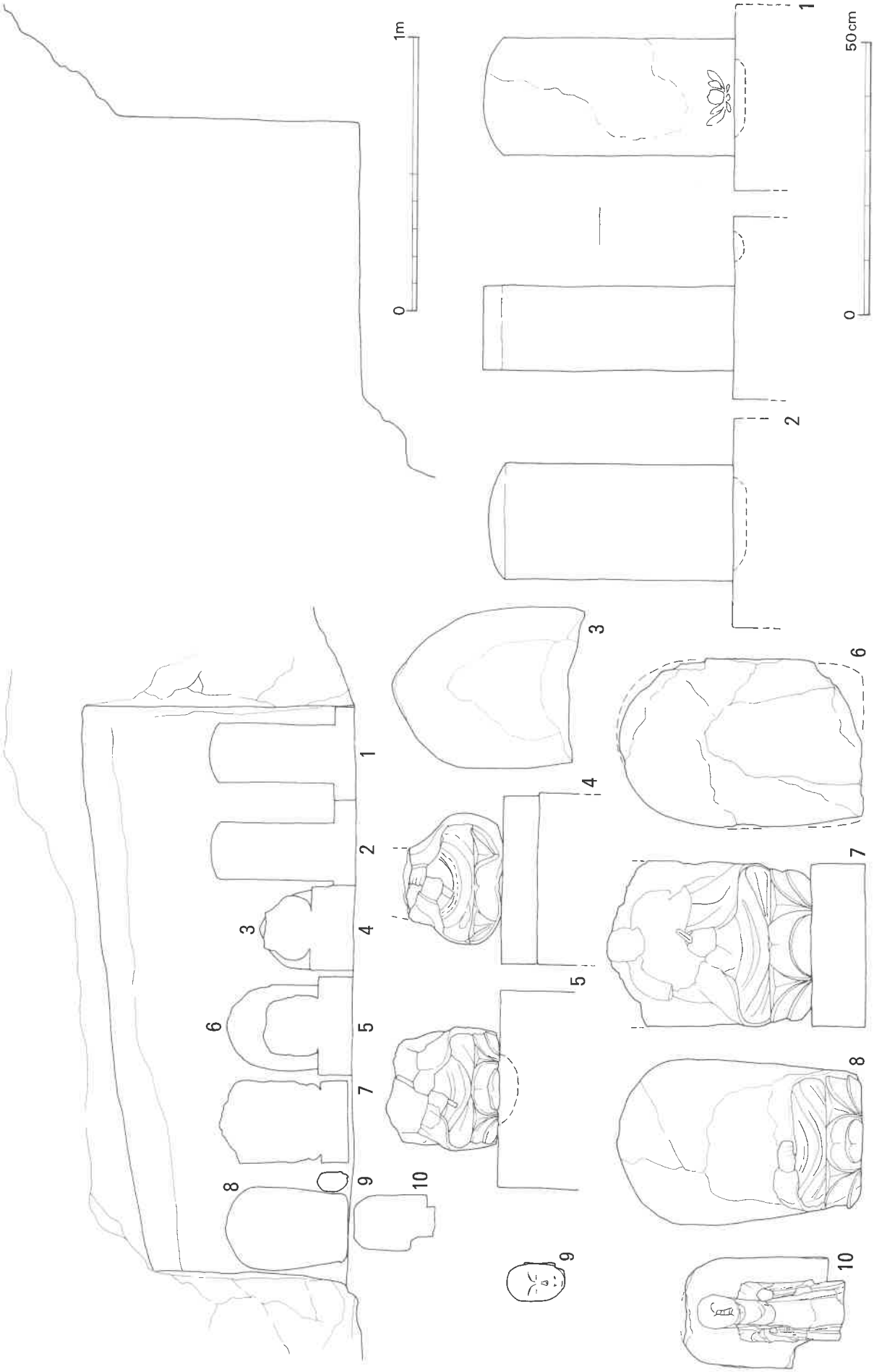
15号窟

0　1m

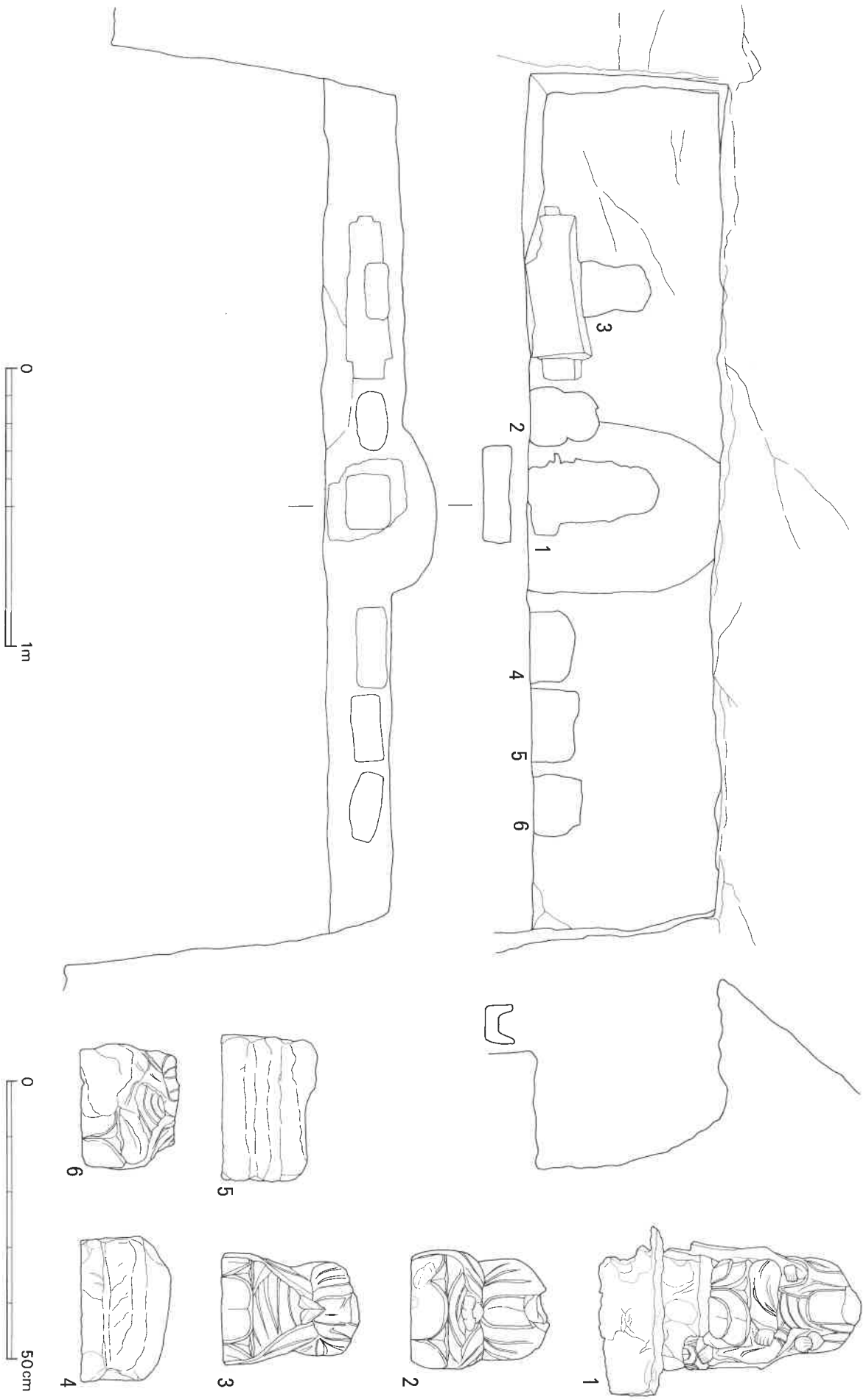
第７図　14号窟・15号窟実測図（Ｓ＝1/20）



第8図　14号窟・15号窟石造物・陶器実測図



第９図　16号窟・石造物実測図



第10図　17号窟・石造物実測図

いのかは不明である。奥壁は床面から0.9mの高さまで平滑である。

16号窟内には、隙間なく石造物が安置されている。右手に円頂方形墓標1基、円頂方柱墓標1基があり、その北側に後背を含む石仏が8基確認できる。石仏は光背と仏部とに分かれたものもあり、当初は5体であった可能性がある。4、5、7は両手で仏幢幡を持っている。1は円頂方形墓標で、台座には水受けがある。下部には蓮弁が表されている。2は円頂方柱墓標で、台座には水受けがある。1と2の幅はほぼ同規格で約22cmである。3には天明、10には寛延3（1750）年の紀年銘が確認できる。

17号窟

17号窟は16号窟から北0.4cmに位置し、隣接している。16号窟とほぼ同じ高さにある。岩盤を正面幅3m、奥行き0.7m、高さ0.8mに掘り込む。奥壁中央は深く掘り込まれている。奥側の床面は前方より約0.2m高く、奥行き0.2mの平坦面となる。

17号窟内には、石仏が6基、用途不明の石造物1基の他、台座等の部材が残る。中央に安置されている1は保存状態が良い方である。頭部は欠損している。右手に錫杖、左手に如意珠を持っていると推測される。残存高は47cmを測る。一石造りの台座には銘文が鐫刻されているが、風化が著しい。

2は両手を合わせて念珠を持っている。3は両手を合わせて合掌している。3は直方体の石造物の上に置かれている。その石造物は両小口に方形の突起が造作されており、何らかの部材に挿入して使用されるものと考えられる。

4・5は風化しているため形態は不明である。6はわずかに衣の表現が見て取れる。

18号窟

4号窟の南2.5mに位置し、内部には石造物はない。岩盤を正面幅1.85m、高さ1.9m、奥行きは左側で3m、右側で4.3mに掘り込む。

群番号5

群番号5は岩窟以外にも石造物が存在する。下段平坦面の15号窟前方に、組合せ宝篋印塔2基、一石五輪塔2基、無縫塔2基、墓標16基が確認できる。第12図6と8は中段に存在する。科学分析は実施していないが、石材は福光石と考えられるものが多い。

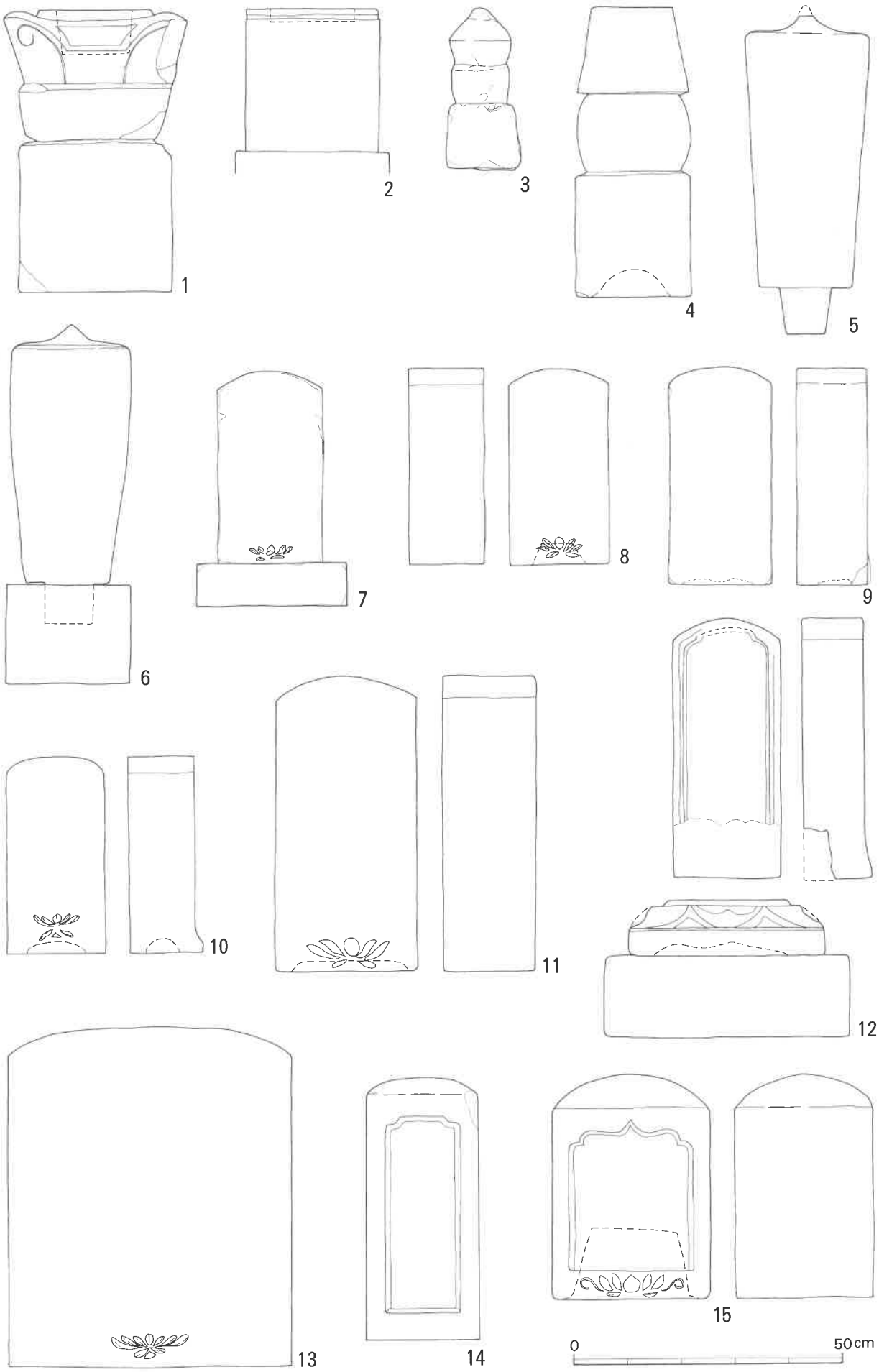
第11図1、2は組合せ宝篋印塔である。1は笠と基礎、2は基礎のみである。1の笠の上部には直径15cm、深さ8cmの円形の孔が穿つ。3、4は一石五輪塔である。3は空風火輪が残る。幅14cmと小型である。4は火水地輪で幅21cmである。5、6は無縫塔で、6は基礎も残る。塔身の規模は5が23×58cm、6が23×71cmである。塔頂部は5より6の方が尖る。6は文久3（1863）年銘である。

7～13は円頂方形墓標である。7，8，10、11、13には墓標下部に蓮弁が表されている。12は蓮花が表現された台座に、枠囲いして内部を彫り込む墓標本体を置く。13は幅約52cm、高さ62cmを測る大型である。この形態は岩窟に入れられているものと類似する。○○屋と鐫刻されている。

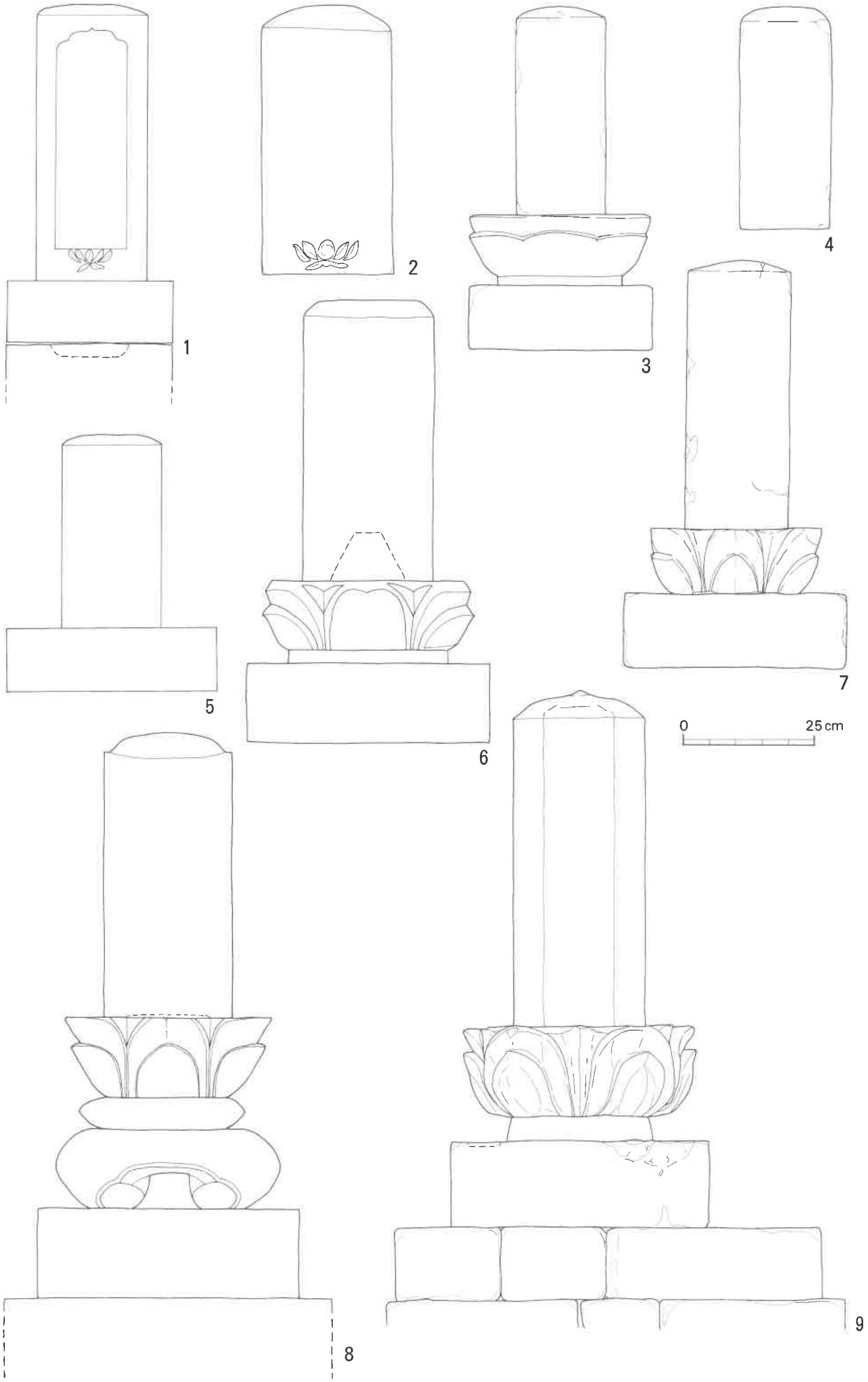
第11図14～第12図7は円頂方柱墓標である。6、7はすべて二段の蓮華を表した台座の上に、墓標本体を設置していている。6は高さ83cm、幅24.5cmを測る。台座の下には幅46cm、高さ15cm以上の基壇がある。

8は突頂方柱墓標である。脚部を持つ台座の上に二段の蓮華を表した台座をおき、墓標本体を設置している。台座の下には二段の基壇がある。

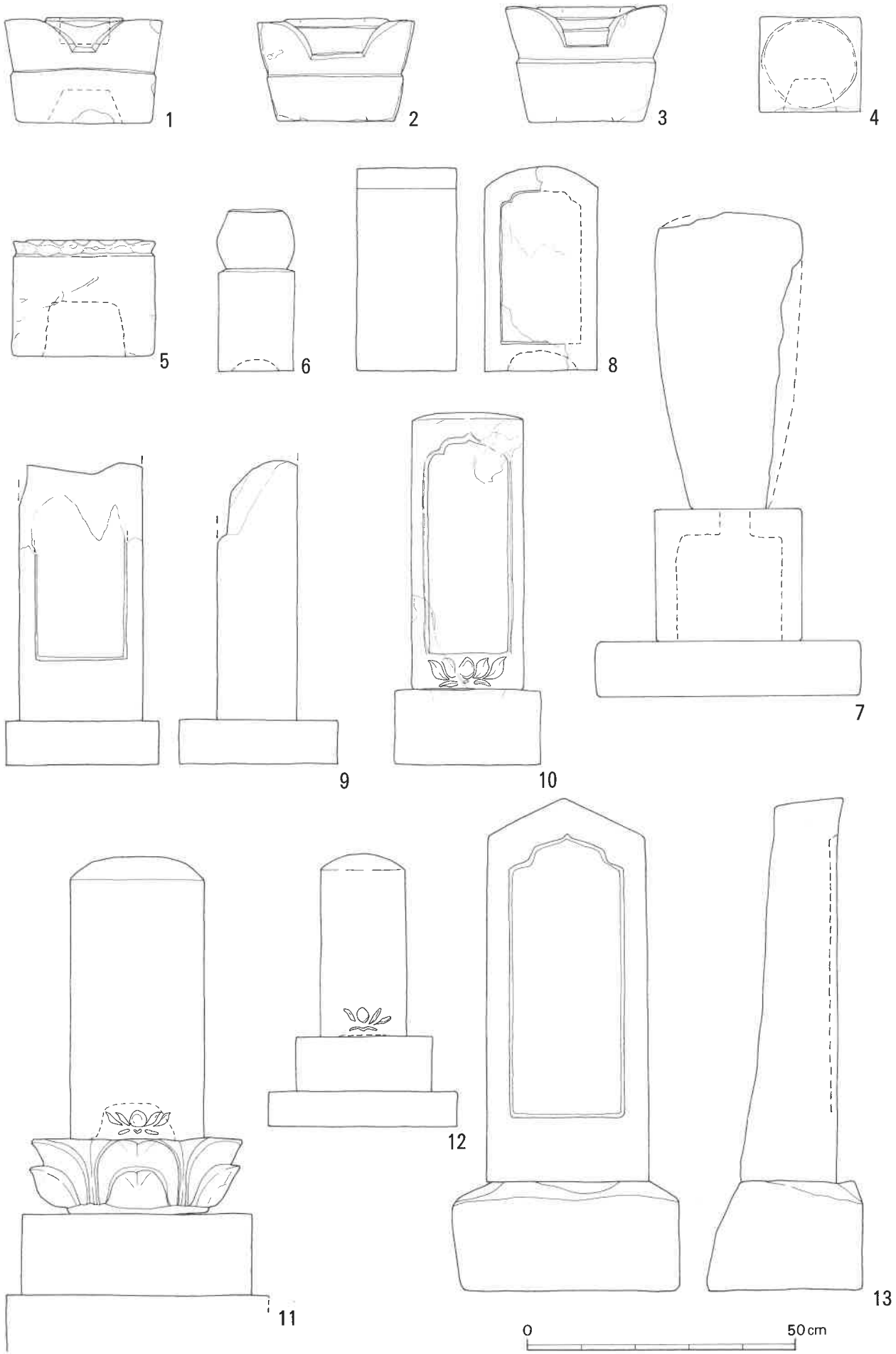
9は尖頂六角柱形墓標の供養塔で、蓮座の上に置かれている。墓標は三段の基壇の上に置かれ、最下部は埋没している。大正14（1925）年の紀年銘があり、「古墳聚霊墓」と鐫刻されている。



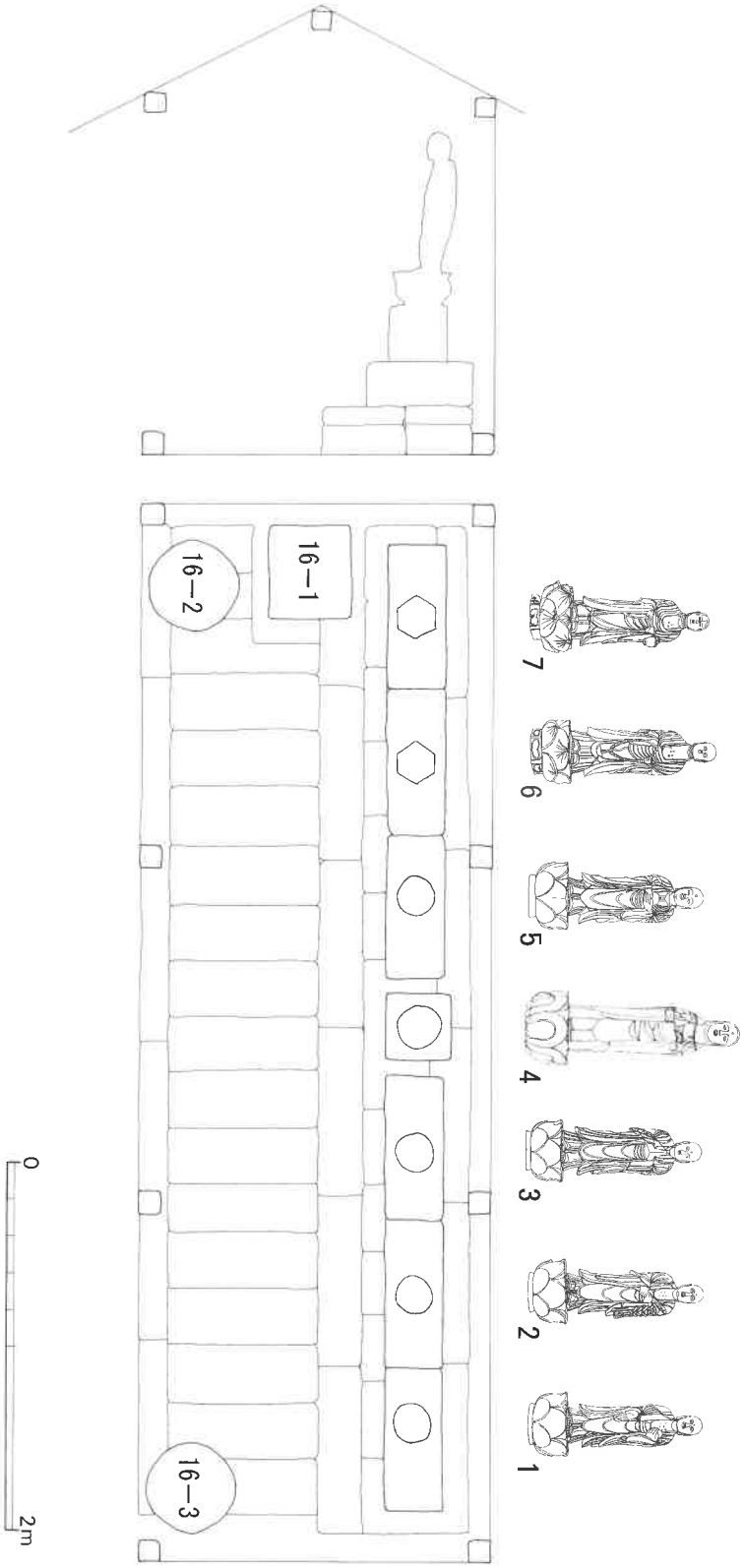
第11図　群番号５　石造物実測図（1）（Ｓ＝1/10）



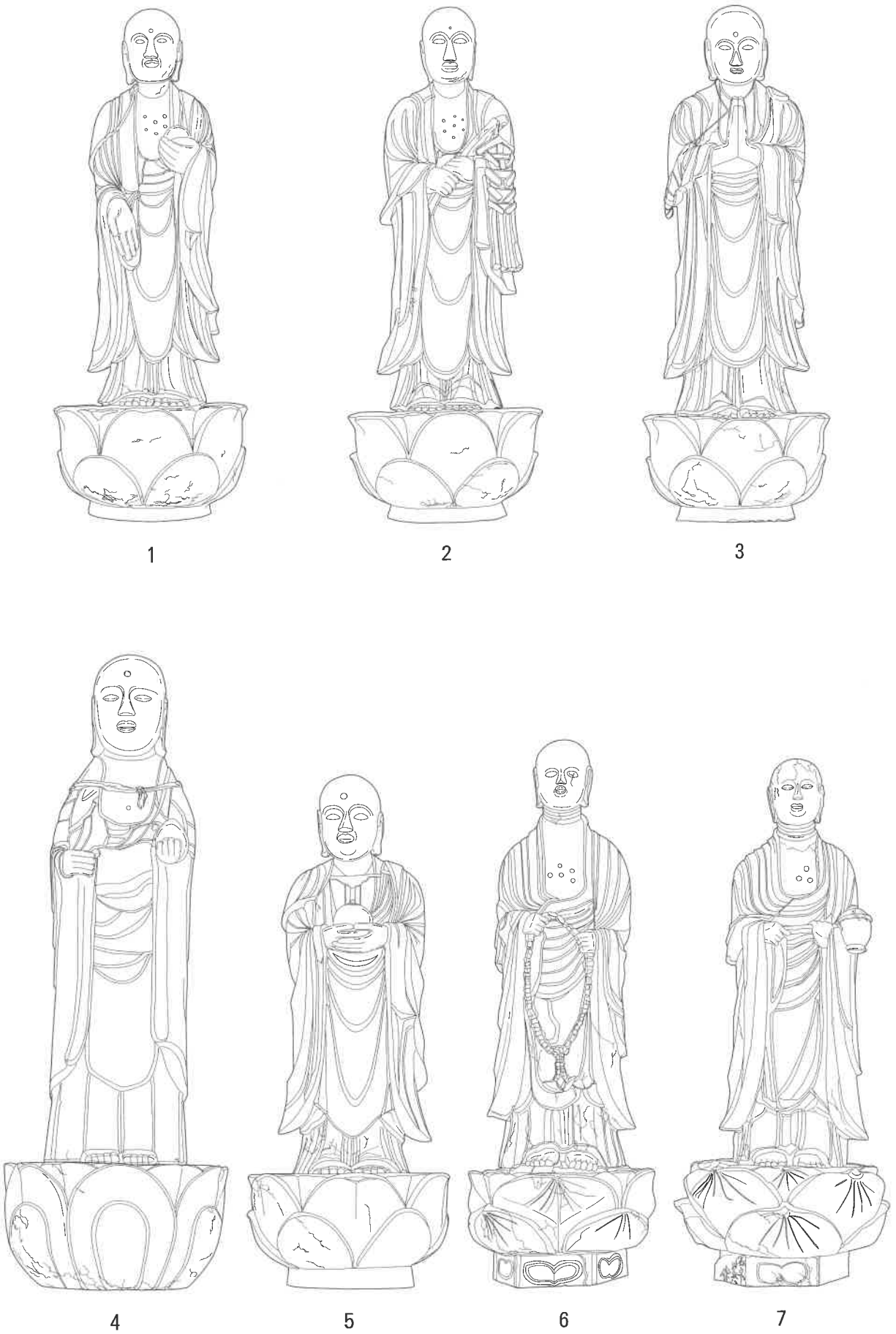
第12図　群番号５　石造物実測図（2）（Ｓ＝1/10）



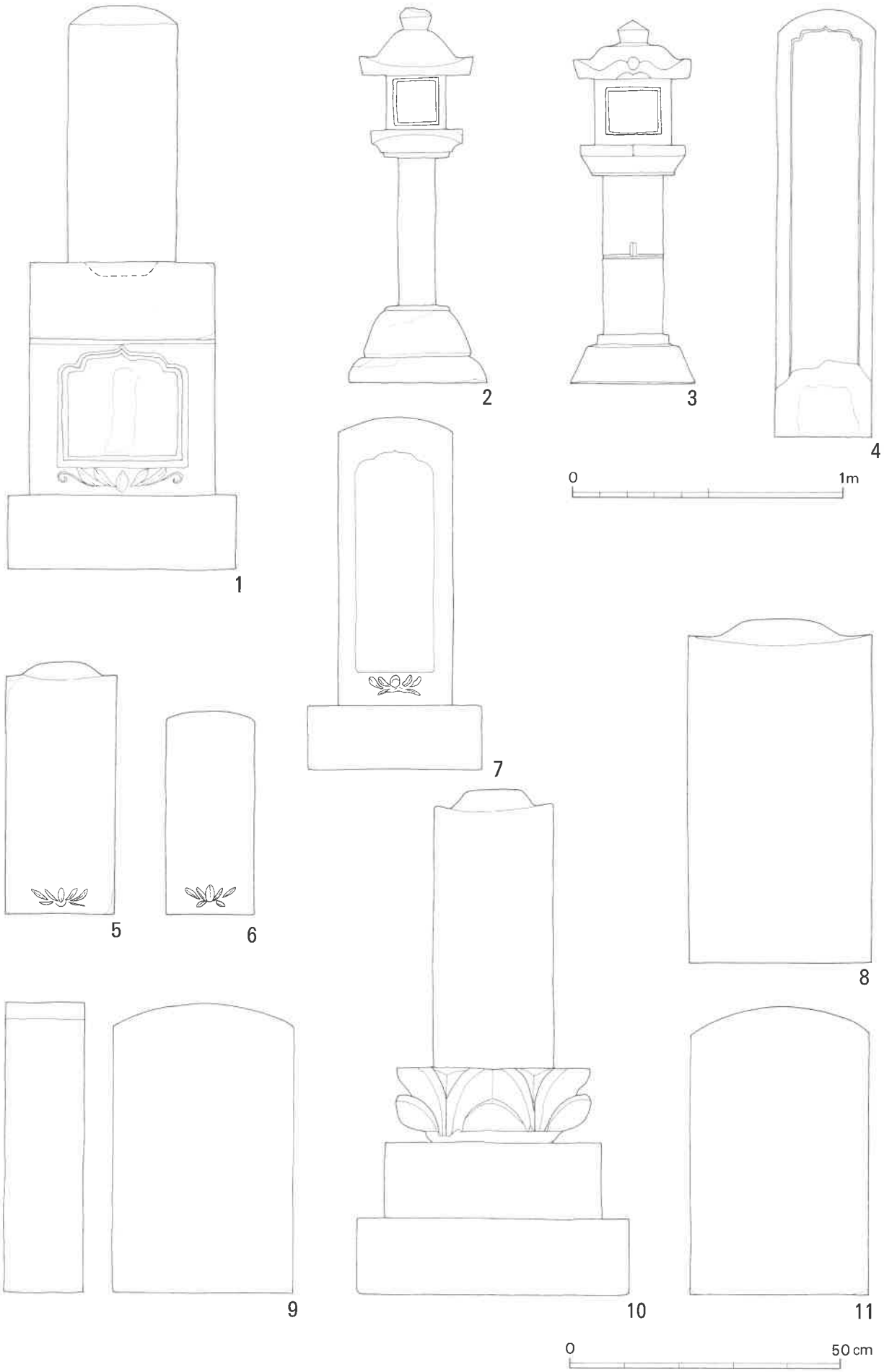
第13図　群番号20　石造物実測図（S＝1/10）



第14図　益田屋　石造物配置図（S＝1/40）



第15図　益田屋　石造物実測図（1）（S＝1/10）



第16図　益田屋　石造物実測図（2）（S＝1/10）

群番号20

群番号20の墓地は西念寺から北に延びる沖泊道と金剛院からの山越えの道が合流する北側に位置する。範囲は南北30 m、東西20 m 程度である。岩盤をくりぬいた水溜を挟んで上下二段に分かれる。下段は南北10m、東西 3 mの平坦面で、石垣などはない。一石五輪塔 1 基、組合せ宝篋印塔 5 基、無縫塔 1 基、墓標 5 基、花崗岩製尖頂方形墓標 1 基を確認した。花崗岩以外の石材は分析を実施していないが、福光石と考えられるものが多い。

上段は石垣を伴う平坦面で、10× 3 mの規模である。東側に岩盤が露出し、壁は垂直に加工されている。壁面に高さ0.63m、幅0.3m、奥行き0.27 mの小岩窟を掘り込んでいる。岩窟の周囲には下部を除き、鐫刻で縁取りされる。内部には幅22 cm、高さ25 cm、奥行き21 cm の立方体の石造物が安置されている。正面には安永 7 （1778）年と戒名の鐫刻がある。小岩窟の前面の平坦面などに墓石等はない。

第13図 1 ～ 5 は組合せ宝篋印塔である。笠の隅飾りには何も表現されていない。 3 の上部段級は二段である。 4 の塔身にはわずかに円形が鐫刻で表現されている。 6 は一石五輪塔であり、水地輪のみ残る。 7 は無縫塔で塔身頂部は欠損している。天明 6 （1786）年銘がある。

8 、 9 は円頂方形墓標で、表面には枠囲いが彫り込まれている。 8 は宝暦 5 （1755）年銘である。10～12は円頂方柱墓標で、下部に蓮弁が表現されている。11は二段の蓮華を表した台座の上に、墓標本体を設置している。10は宝永 2 （1705）年、11は天保 9 （1838）年、12は明治44（1911）年銘である。

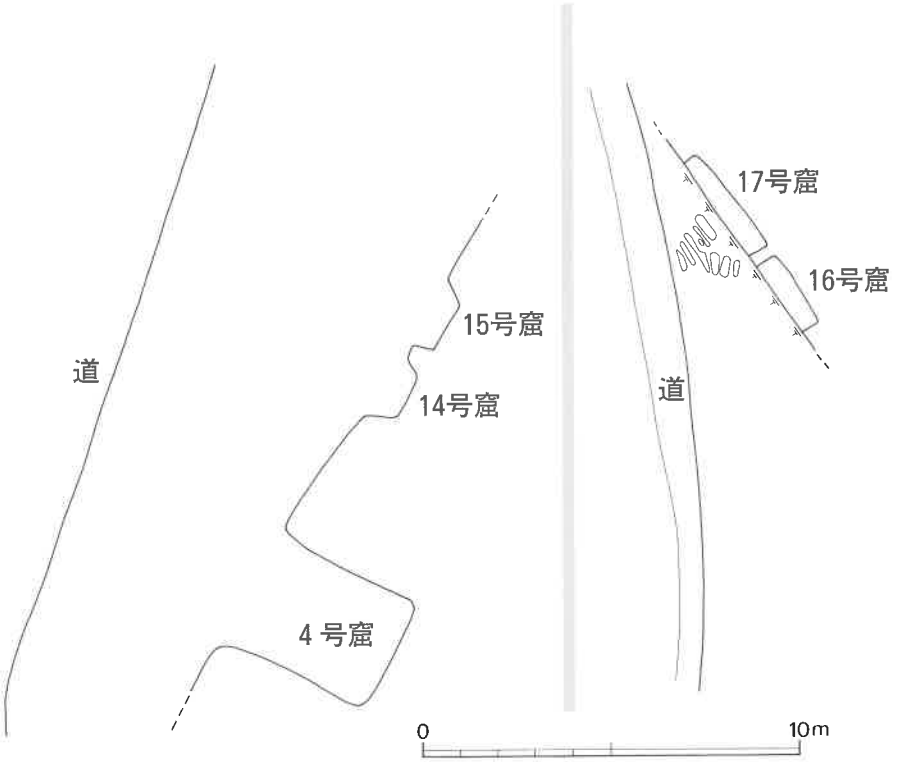
20は花崗岩製尖頂方形墓標である。表面には枠囲を彫り込んでいる。裏面は粗い加工のままである。台座も花崗岩である。元禄13（1700）年銘と享保年間（1716～35）銘が鐫刻されている。

益田屋墓所

益田屋墓所は西念寺境内のうち、表門を入った西側、本堂の南側に一画を占めて造営されている。この墓所の立地から、益田屋が西念寺の有力檀越であったことが判明する。

益田屋墓所は、基壇の上に中心となる一回り大きい地蔵と、この両脇に小形の六地蔵を配したものであり、歴代の戒名は基壇に鐫刻されており、現在も墓所として機能している。これを木造家屋で覆い、正面を開ける構造であり、温泉津地区の日蓮宗・恵珖寺墓地の多田一門の墓所を典型とする廟式墓所の類型として認識することができる。

現状の建物の規模は、間口 3 間（575 cm）、奥行き 1 間（194 cm）であり、前後 4 本づつの柱



第17図　群番号 5　岩窟配置図（S ＝1/200）

をコンクリート製の礎石の上に建て、軒の高さを6尺（182 cm）に設け、このうえに切妻妻入り型式の屋根を架ける。正面を除く3面の壁は板材を打ち付けたものであり、正面は上半分を開けて下半分には格子扉を配置したものである。

家屋内部は前面に敷石、奥側に基壇を設け、基壇の上に地蔵7躰を安置している。敷石および基壇の範囲は、間口547 cm（18尺・3間）、奥行き180 cm（6尺・1間）であり、この墓所が構築された当初は、敷石および基壇の範囲に限定された規模であったものと想定できる。

敷石および基壇、さらには両脇の6地蔵は福光石を用いているが、中央部に安置された大形の1躰の地蔵は、基壇を含めて花崗岩製であり、明確な違いを示している。

地蔵7躰を安置している基壇は、3段で構成されている。最下壇は奥行き83 cm、高さ16 cm、幅86～92 cmの石材6個を前後に並べ、この上に厚さ10 cmほどの石材を重ねて高さ26 cm（9寸）の壇を造作している。

この上に奥行き58 cm（2尺）、高さ24 cm（8寸）の壇を造作している。前側に奥行き39 cm（1尺3寸）の石材13個を並列し、奥側には幅19 cm、長さ90 cm（3尺）を基本とする石材を6個並べて造作されている。

上壇が地蔵7躰の基礎をなすものであり、中央の大形の1躰が独立しており、奥行き・幅・高さともに36 cm（1尺2寸）の直方体をなす。

両脇の3躰づつの基礎は、高さ30 cm（1尺）、奥行き33 cm（1尺1寸）、長さ80 cm（2尺7寸）を基本とする3個の基礎が連接している。

基壇の前面の敷石は、幅30 cm（1尺）を基本とする長さ82 cm（2尺7寸）の石材を18枚並列し、この前端に幅15 cm（5寸）、長さ90 cm（3尺）を基本とする石材を6個体並べている。

墓所内には、個別の基礎の上面に彫り込まれた枘孔にあわせて蓮台を置いて7躰の地蔵を安置するほか、敷石の前端の両側に2基の燈籠を配置している。墓所に燈籠を配置するところからも、この墓所が上位階層に属する点を明示している。

さらに向って左側の燈籠の奥側には墓標が安置されている。

この墓所の中心をなすのは、4の地蔵である。蓮台と地蔵本躰を一体として制作されたものであり、蓮台の径40 cm、高さ23 cm、躰高92 cmを測る花崗岩製であり、地蔵本躰は左手に宝珠を持ち、右手は現在欠失しているものの、別あつらえの錫杖を伴っていたものと思える。蓮台には重弁の蓮弁を6葉彫刻しており、地蔵本躰は、なで肩で、特に右側が顕著な細身の像容である。正面には居士・大姉の夫婦の戒名を刻んだ世代墓であり、向って左に没年を刻んでいる。ともに浄土宗に特有の誉号戒名であり、院号を有している。墓所の立地・構造にあわせ、戒名にも階層性が顕著に表れている。居士は元禄10（1697）年であり、大姉は正徳2（1712）年である。基礎の右側には、「長劦萩家中○○藤兵衛高秀／行年八十四才／同妻行年六十一才／當家元祖／○○藤右エ門高啓／両親也」と銘記されている。すなわち、先祖の出身ゆえの「益田屋」の屋号と認識されるところである。

両脇に安置された6躰の地蔵は、2区分できる。①類は右側に安置された1・2・3、および左側の5であり、総高93～94 cm、蓮台の高さ19～21 cmとほぼ高さ3尺1寸を基調とした制作と判断できるものである。

この様相に対して、②類である左側に安置された6・7は蓮台および像容において①類と異なっており、制作時期の異なることが推測される。1は総高93 cm、蓮台の高さ20 cmであり、基礎と地蔵本躰と一体として制作したものである。蓮台は、上下2段に6葉の簡素な蓮弁を配している。この様相は①類に共通するものである。地蔵本躰は左手に宝珠、右手は施無畏印とする。2は総高93 cm、蓮台の高さ20 cmと1と同法量である。地蔵本躰は、両手で幢幡を持つ。3は総高94 cm、蓮台の高さ19 cmと、1・2とは微妙に異なる。

地蔵本躰は、両手を合掌する。5は総高93 cm、蓮台の高さ21 cmであり、地蔵本躰は両手で宝珠を持つ。②類である6は、総高99 cm、蓮台の高さ21 cmであり、蓮台の基部の高さ6 cmを六角として、この部分に格座間を表している。蓮台の二重の蓮弁細かい作りである。この様相は7と共通する。地蔵本躰は、細顔でなで肩を特徴とするやや細身の像容であり、両手で念珠を持つ。7は総高96 cm、蓮台の高さ23 cmであり、地蔵本躰は両手で柄香炉を持つ。

以上に概要を記した7躰の地蔵は、花崗岩製の4と、福光石製と思われるものでは①類の1・2・3・5と②類の6・7に3区分できるが、制作年代は明確にはならない。4は紀年銘により元禄10（1697）年と、正徳2（1712）年が知られるが、これは正徳2年を制作の上限年代として捉えられるに過ぎない。また福光石の①・②類は、制作の精粗から判断すると、②類の年代的な先行が窺われるに過ぎない。

7躰の地蔵の基礎には、その正面に7を除き戒名が鐫刻されている。正面の戒名以外にも裏面には、それぞれの続柄と享年および没年を基本とした銘文が刻まれている。

4は上記した如くに元祖の両親の戒名を刻む特別のものである。1は向って右側に子供3名の戒名、左側にも子供3名の戒名を刻んでいる。さらに中央には院号を有する誉号の居士1名、同じく院号を有する誉号の大姉2名の戒名を刻んでおり、この中央の3名の戒名は近年刻まれたものである。2には子供7名と信士1名の戒名を刻んでおり、3には子供4名、信士1名、大姉1名、院号を有する誉号の大姉2名の戒名を刻んでいる。院号を有する大姉の戒名は、早死にした3代当主の妻と、成人して他家に嫁ぎ、没して実家の墓所に合祀されたものである。

すなわち1・2・3は、基本的には本来益田屋歴代の子供のみの戒名が刻まれたものである。

これに対し5・6には、すべて院号を有する誉号戒名に限定されており、益田屋歴代の当主夫婦の戒名を刻んだものと確認できる。5には居士3名、大姉5名の合計8名の戒名が刻まれている。6には居士4名、大姉6名の合計10名の戒名が刻まれている。

基礎の裏面に刻まれた続柄および没年から、元祖藤兵衛高秀の没年が元文2（1737）年、2代目七良兵エ高英の没年が寛政元（1789）年、3代目七良兵エ英澄の没年が文化8（1811）年と確認できる。

4代目は仁兵エ英□が文化3（1806）年に30歳で没した後、良兵エ英郁が4代目を継承している。没年は確認できないが、先妻が文政3（1820）年、後妻が天保11（1840）年に没しており、この間に没したものと思える。5代目の良兵エ英秀の没年は確認できないが、英秀妻は安政6（1859）年に没している。

すなわち江戸時代おいては益田屋は、5代に及ぶ当主の変遷を確認することができるものである。

5・6の基礎に歴代当主夫婦のみの戒名を刻む点を重視すると、基礎と地蔵の現状の組合せには若干の疑義が生ずる。可能性としては5と7の地蔵の本来の組合せが逆転していることも想定できよう。②類の地蔵が歴代当主を中心とした戒名刻んだ基礎に伴う可能性が高いものと想定できよう。

この益田屋墓所は、敷石および基壇を覆う家屋構造が旧状を残さず完全に再建されていることもあって、石材に構築年代は明示されていない。保存されている棟札に「精霊墓所／享和三年癸亥／八月大吉日／〇〇七良兵エ英澄建立」と確認できる。すなわち3代目七良兵エ英澄の代の享和3（1803）年に構築されたことが確認できる。精霊墓所を構築するに当たり、以前に他所に造営されていたであろう墓所を統合したものと思える。7の基礎には墓所構築に関わった工人名として「石工／吉兵／作」の銘文が確認できる。

益田屋墓所内には、1基の通常形態の墓石も安置されている。1の総高103 cmの円頂方柱墓標

であり、基礎の下部に重ねられたものは別の墓石の部材である。刻まれた戒名は院号を有する誉号の大姉、院号を有する釈〇〇居士、釈〇〇童子であり、推測されるところは益田屋出身の女性とその子供が実家の墓所に祀られたものである。

2と3は墓所正面の両脇に配置されていた燈籠であり、ともに福光石製と判断できる。2は総高138 cmを測る燈籠であり、竿は方柱状、基礎は平面円形を呈する、中台に蓮弁を表さない簡素な形状のものである。3は総高133 cmを測る、基礎の平面六角形、竿は中央に節を表す太い円柱状、中台は平面六角形、笠は正面を唐破風とする燈籠である。これら2基の燈籠は、墓所の両脇に配置されているものの、形状を異にしている。ともに紀年銘は刻まれておらず製作年代は不明であるが、燈籠の形状変遷を勘案すると3の先行、2の後出と判断できる。

4～11の墓石は、益田屋墓所の軒下に集積されていたものであり、直接的に益田屋と関連するものではないが、一部は益田屋有縁の家の墓石である。すべて福光石製と考えられる。

4は総高156 cm、幅36 cmを測る名号塔である。輪郭内を一段彫り下げた内部の上端に梵字阿弥陀種子であるキリークを刻み、この下に「南無阿弥陀仏」と刻まれたものであるが、「陀仏」は剥落している。両脇に刻まれた銘文により、明和5（1768）年に萩村の井田氏が先祖代々と三界万霊の菩提供養のために建立したものと判明する。

5～11の墓石はいずれも福光石製である。5は幅20 cm、高さ46 cmの突頂方柱墓標であり、大正3年の童女の墓石である。6は小形の幅16 cm、高さ37 cmを測る円頂方柱墓標であり、昭和33年の子供の墓石である。7は集積された中では最も古い享和元（1801）年の、基礎を伴う幅22 cm、高さ53 cm、総高65 cmの円頂方柱墓標である。墓標本体正面を一段彫り込んでおり、下端には蓮弁を刻んでいる。彫り込み内には最上段に阿弥陀の梵字種子のキリークを刻む信女の個人墓である。

8は幅34cm、高さ63 cmの突頂方柱墓標である。明治43年の誉号戒名の信士の墓石である。9は幅33 cm、高さ54 cmの円頂方形墓標である。正面の上位に先祖代々と表記し、この下に5名の誉号戒名を刻むものであるが、下位書は表面剥落により明確ではない。昭和3年の濱本屋の墓石であり、形状から判断して本来岩窟内に安置されていたものと判断できる。10は基・蓮台を伴う突頂方柱墓標であり。総高94 cm、本体幅22 cm、高さ52 cmを測る。明治9年の誉号戒名の大姉と童女の合祀墓である。11は幅33 cm高さ54 cmの円頂方形墓標であり、9と同規格である。誉号戒名を4名連記したものであり、9とともに岩窟内に安置されていたものと思われる。

以上に益田屋の廟式墓所および墓所に寄せられた墓石の概要を報告したところであるが、益田屋の階層性は集積された墓石に確認される戒名によっても明確になる。すなわち、益田屋にあっては歴代当主の戒名は、院号を有する11文字の誉号戒名であり、明確に区分される。

濱本屋の墓石に確認できる誉号戒名は6字戒名であり、峻別されている。しかしながら浄土宗における誉号戒名は相対的には上位階層に用いられており、濱本屋の位置を窺知することができる。

第5節　まとめ

西念寺の調査は3年目を向かえた。今年度は群番号5と群番号20、益田屋墓所を中心に調査を実施した。群番号5では48基、群番号20では13基、益田屋墓所では17基、計78基の石造物を確認した。温泉津地区の寺院墓地を特徴付けている西念寺墓地の岩窟墓地については調査が終了した。

群番号5からは岩盤を掘削した岩窟墓地が6基（4号、14～18号）確認できた。14号、16号、17号窟は各家族で構成されていることが判明し、今次までの調査成果を追認できた。

紀年銘から各墓地での造墓年代をみると群番号

5は4号窟の伝松浦家墓所に慶長18（1613）年が認められるが、その他は1750～1925年である。群番号20は1700年～1911年であり、古手の組合せ宝篋印塔などの数も多い。群番号5や20では円頂方形墓標の年代は1755～1905年、円頂方柱墓標は1705年～1911年である。群番号20において、第13図3の組合せ宝篋印塔の笠には「蓮」が刻まれ、「日蓮宗」の妙法蓮華経の一部である。また、第13図12には釈尼○○と、群番号5において第11図8、第12図2には釈○○と浄土真宗に特有の戒名が認められる。また、形態から第11図7、15も可能性がある。ある時点、恐らくは明治以降に有縁の墓石を他所から寄せたものと判断できる。この様相は長楽寺跡や妙正寺跡など銀山地区でも多く確認されている。

石材に関して花崗岩製1基以外は地元で産する福光石が中心である。しかし、最近の調査で、緑色凝灰岩である福光石の周辺からやや白色を呈する砂岩の石切場跡も確認されていることから今後詳細な分析も必要になってきている。

花崗岩製品については、群番号20から尖頂方形墓標が確認できた。これには元禄13（1700）年と享保年間（1716～1736）の紀年銘がある。西念寺墓地においては高津屋墓地に延宝6（1678）年、貞享元（1684）年笠付方形墓標2基があり、花崗岩は17世紀後半から18世紀前半には使用されていたことが判明した。

現在までの調査により判明した事実をもってすれば、温泉津地区における墓石の特徴は、一石を彫製した宝篋印塔と五輪塔、組合せ宝篋印塔と五輪塔からなる墓塔類から、方形ないしは方柱墓標への変遷が確認することができる。この点は銀山地区の諸墓地と同様相として認識できるところである。留意される点は、江戸時代の前半代に特徴的な光背形墓標と、僅かではあるが花崗岩製の墓標の存在が認められた点である。

唯一確認された尖頂方形墓標は、背面を荒く彫整した、下部が僅かに厚くなった板状石材の頂部を尖らせたものであり、享保年間の造立と確認されるものである。この形態の墓標は、東国の17世紀代に特徴的な光背形墓標からの変遷として、東国各地に確認されるところである。

東国の17世紀代に盛行した光背形墓標は、温泉津地区で採用している慶長期に特有の光背形墓標と同一名称であるが、実態は異なる。幅広本体の頂部は両側から円く中央に向って収束し、中央部は僅かに前傾しながら突出するものであり、背面は船底状に円く仕上げるものである。

この形態の変遷の結果として、頂部は直線状に尖り、背面は板状に仕上げられるようになる。変遷の要因としては、方形状石材を使用した円頂方形墓標の存在に求めることができる。

温泉津を含め石見銀山地区においては、確認できた尖頂方形墓標に先行する東国型光背形墓標の存在は確認されてはいない。類似形態の墓標は、西国各地に確認されており、現状では慶長期に特有の光背形墓標とともに一時的に新要素が受容されたものと考えられよう。海を介した各地との交流の結果と判断されるところであり、温泉津地区の特性と理解されよう。

群番号5の第12図9は、尖頂六角柱形の大正14年に造立された「古墳聚霊墓」である。極めて特徴的な石造物である。意味するところは、墓地整理時に無縁墓となっていた先行墓を供養したものであろう。各地の「古墳供養塔」は、東国を中心として昭和30年代までの存在を確認することができるが、いずれも工事に伴い古墳ないしは横穴墓から出土した被葬者人骨を供養するためである。

ここで確認された供養塔は、古い墳墓から出土した人骨を供養したものであり、一般的には「無縁霊位」とされるところである。

第6節　総　括

1）浄土宗西念寺（創建1561年・永禄4年）は、境内東縁に沿って温泉津・沖泊街道が走り、南に開く山門より500m先に温泉津港の埠頭がある。寺域は南北に延びる狭い谷合いに展開する、一見窮屈な立地状況を示している。しかし、当寺は上記のように、海陸交通の要衝地点にあって中世後半から近世・近代初期にかけて盛んな寺勢を誇っており、その趨勢は、境内とその周辺に残る種々の石造物の様相にも色濃く反映されている。

石見銀山遺跡石造物調査グループは、平成18年度より3ヵ年にわたって西念寺境内と周辺に分布する墓地・墓石を中心とする石造物調査を行い、所期の成果を十分に上げることができた。以下、主として平成20年度調査を顧みながら、全体の調査状況と得られた特徴的な事項を略記し、若干の意義を付して総括とする。

2）まず、平成20年度の調査について特徴的な事象を取り上げておこう。

調査箇所は、当寺東門より街道を北へ緩く上昇すること150～200m。道沿いの東崖面に存在する群番号5、群番号20の墓石群＝「境内北側墓地群」（仮称）と南門西脇に設えられた益田屋墓所の2箇所である。

「境内北側墓地群」について：群番号5の墓所は南低・北高の道傾斜に従って3段直列に配置される。南端の下段部平坦面（南北25m、東西5m）には、平成18年度調査の第4号窟（伝松浦家墓所）があり、この窟の南側に第18号窟（墓石等の石造物無し）、北側に第14号窟（円頂方形墓標3）と第15号窟（墓石無し。移動・改葬か）があり、窟前に墓石（組合せ宝篋印塔、一石五輪塔、無縫塔、墓標系墓石）が転在した。中段面（南北11m、東西5m）には岩窟は見られず、墓石数点（墓標系墓石、無縫塔、円頂方柱墓標）の存在が確認された。上段部には第16号窟（円頂方形墓標、円頂方柱墓標、石仏）と第17号窟（石仏他）が存在する。

群番号20は、群番号5からさらに登った街道東縁の位置に占地している。標高の低い下段面（南北30m、東西3m）とやや北寄り高手の上段面（南北10m、東西3m）に分かれる。下段面では墓塔系等（一石五輪塔、組合せ宝篋印塔）、無縫塔、墓標系の他尖頂方形墓標（花崗岩製）1基が見出された。上段面では小岩窟内に約20cm四角の石造物が納まっていた。

以上、「境内北側墓地群」（群番号5、群番号20）からは5段7箇所（第4号窟を含む）の岩窟が確認され、その内外と隣接部から墓塔系墓石（組合せ宝篋印塔、一石五輪塔）、無縫塔、墓標系墓石（円頂方形、円頂方柱、その他）、石仏等の所在を確認したことになる。一窟単位では改葬・移動・改変等々で必ずしも良好な存在状況を認め得ないが、第4号窟（伝松浦家墓所）、第14号窟（○○屋墓所）等は一家族の墓所と推定できる例として貴重である。また、段状平坦面も何等かの親戚関係で結ばれた墓域である可能性が高い。例えば、群番号5の最下段に並ぶ18号、4号、14号、15号諸窟は、その規模や位置取り状態から見て第4号窟を核とする歴代親者集団の奥津城と考えることもできよう。そのように推定が許されるならば、群番号5、群番号20は複数の親縁者集団によって営まれた墓所と見得ることになる。

次に群番号5、群番号20の墓石数が少数の墓塔系と多数の墓標系によって構成されていることが判明したが、この大勢は石見銀山遺跡全体の墓地・墓石の構成と変遷に合致するものである。ちなみに、確認された紀年銘を有する墓石は、第14号窟の安政4（1857）年や明治期の円頂方形墓標、第16号窟の寛延3（1750）年の円頂方柱墓標等で、群形成期の墓塔系の紀年銘は不詳である。しかし、かの伝松浦家墓所（4号窟）に所在した光背型墓標の慶長18（1613）年を参考にすれば少なくとも17世紀中には墓地の形成が開始されていたと判断される。群番号20で発見された花崗岩製の尖頭方形墓標の一部に元禄13（1700）年と刻まれていた

ことも推定を助ける材料であろう。いずれにしても、16世紀から17世紀の移行期より墓地の造営が始まり、17世紀後半には早くも墓標系が登場し、18～19世紀にかけて墓標系墓石が飛躍的に増加しつつ近代へ転じたと考えられる。

益田屋墓所について：益田屋墓所は南門の西脇に設置されている。瓦葺・切妻形式の長い覆屋（間口3間、奥行き1間）に7躰の地蔵立像が横並びで納められている。この墓所は、棟札によって享和3（1803）年3代目当主により建設され、初代からの墓地を整理・統合し、以後の一族の廟所としたことが想定される。7躰（右端から1～7とし、中央像は4とする）の立像は、花崗岩製の大形像4を中心に左右に3躰が配される。1～3・5と6、7の像には作様に違いがあり、後者が先行して制作されたと解釈されたところである。4像以外の像はいずれも福光石製である。他に墓所内外には墓標系墓石数基が存在する。

各像の台座正面に記された戒名等から近世益田屋の5代当主を軸核とする家族・親縁集団墓所であり、その上限は4像の紀年銘より18世紀前葉に遡る。下限は5代目妻の没年（安政6・1859年）から推して19世紀後半代が考えられる。戒名中には院号を持つものが多く、2基の燈篭を立てる等墓所の設え方にも豪壮な雰囲気が感じられる。益田屋元祖は「長州萩家○○上藤兵衛高秀」（元禄10・1697年没、行年84才）と名乗っていることを見ても17世紀後半代から繁栄した家勢振りが偲ばれる。

3）都合3年間にわたる浄土宗西念寺墓地の調査は、当寺の創建・立地事情も含めて、墓石の分布・種類と墓地における構成の在りよう等に関し貴重な成果を獲得することができた。あらためて、特徴的な事象を列記するならば、①岩窟様式ともいうべき墓地構造の解明ができたこと、②中・近世の交替期から近世末期、さらに近代以降も含めた浄土宗派寺域の墓地・墓石の展開を墓塔系から墓標系への変遷の中で確認できたこと、③わけても、銀山中枢部域ではほとんど見られない墓石として光背型や尖頂方形型の墓標の存在を明らかにしたこと、④花崗岩製の墓石の性格と使用年代を特定しえたこと、等を上げることができる。

また、西念寺の歴代僧侶の墓地、「伝松浦家」、高津屋、益田屋の一族墓地の構成を明らかにしたが、この成果は、今後文献資料等との突合わせを通して、いわゆる「温泉津町衆」とされる有力商人の盛衰を考察する上で大きく貢献することが予測される。

こうした成果を眺めると、なお、いくつかの課題が見えてくることも否定できない。思いつくままに記すと、群番号4、群番号5、群番号20が温泉津・沖泊街道に面していることは度々延べた。これらの墓地・墓石の現状を察すると街道の修理・付け替え等によってかなり改変を受けているような印象を受ける。同時に街道の西側に階段状に分布する平坦面の性格も気になるところだ。もって、街道一帯の景観復元を志したいものである。

いま一つの課題としては、尾根一つ東側の金剛院墓地、小浜地区の極楽寺墓地の悉皆的調査が残る。これらの調査を経て初めて温泉津地区における石造物の変遷と特徴の総体が明らかになるはずである。

第４章　安原備中墓

今回報告する「安原備中墓」は、銀山柵内のうち安原谷と呼ばれる谷の奥部、丘陵斜面に形成された平坦地にある石造物群である。

安原谷はその名が示すとおり、石見銀山の石見銀山最盛期に活躍した山師、安原伝兵衛及びその一族と関わりが深い可能性がある谷である。谷がはじまる付近には「霊所」とされる岩窟も存在している。

石造物は現状で７基確認でき、後述する円頂方形墓標を中心にその周囲に、他の墓石が存在している。その内訳は、組合せ宝篋印塔３基、一石宝篋印塔２基、一石五輪塔１基、円頂方形墓標１基であり、これ以外に数点の部材がある。一石造のもの以外は一部を失っており組み合わせは不確かである。

１は円頂方形墓標である。46㎝×46㎝の基礎の上に、高さ62㎝、幅27.5㎝の墓標が造立されている。正面に「来迎院紫圏浄雲禅定門」、右側面に「元和九癸亥年八月五日」、左側面に「銀山忠功　安原備中知種墓」と鐫刻されている。なお裏面には「萬延元庚申年秋再建之」とあり、これが再建されたものであることが分かる。

２、３、４は組合せ宝篋印塔である。いずれも塔身を欠くもので、４は基礎部も確認できなかった。相輪は、九輪部の表面が線刻されず、また伏鉢上部の請花が表現されていないものである。笠部は、下部に蓮弁と間弁を、軒上部には外傾した隅飾り表面に線刻を施している。これらのうち２には、相輪・笠・基礎の各部材、４面すべてに梵字が鐫刻されている。

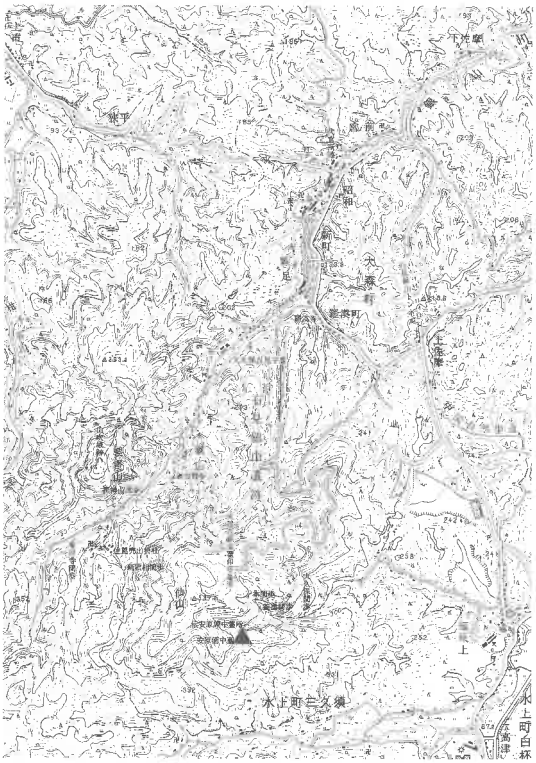
６、７は一石宝篋印塔である。一部を欠いているものの基本的な形状は把握できる。６は現状で高さ90㎝を測る。相輪部は、九輪部が平滑で下部に請花を伴う。また正面には、相輪部に「妙法」、笠部に「蓮」、塔身部に「華」、基礎部に「経」が鐫刻されている。正面には「寛文四甲辰　経囮清弐　七月㊀十六日」の紀年銘が確認できる。７は相輪部の途中で折れているものの、総高が91.0㎝と確認できるものである。正面には梵字が鐫刻されている。

８は一石五輪塔である。総高が59.0㎝、幅は最大で15.0㎝と小ぶりなもので、「元禄四年　□□童女　正八月廿九日」とある。

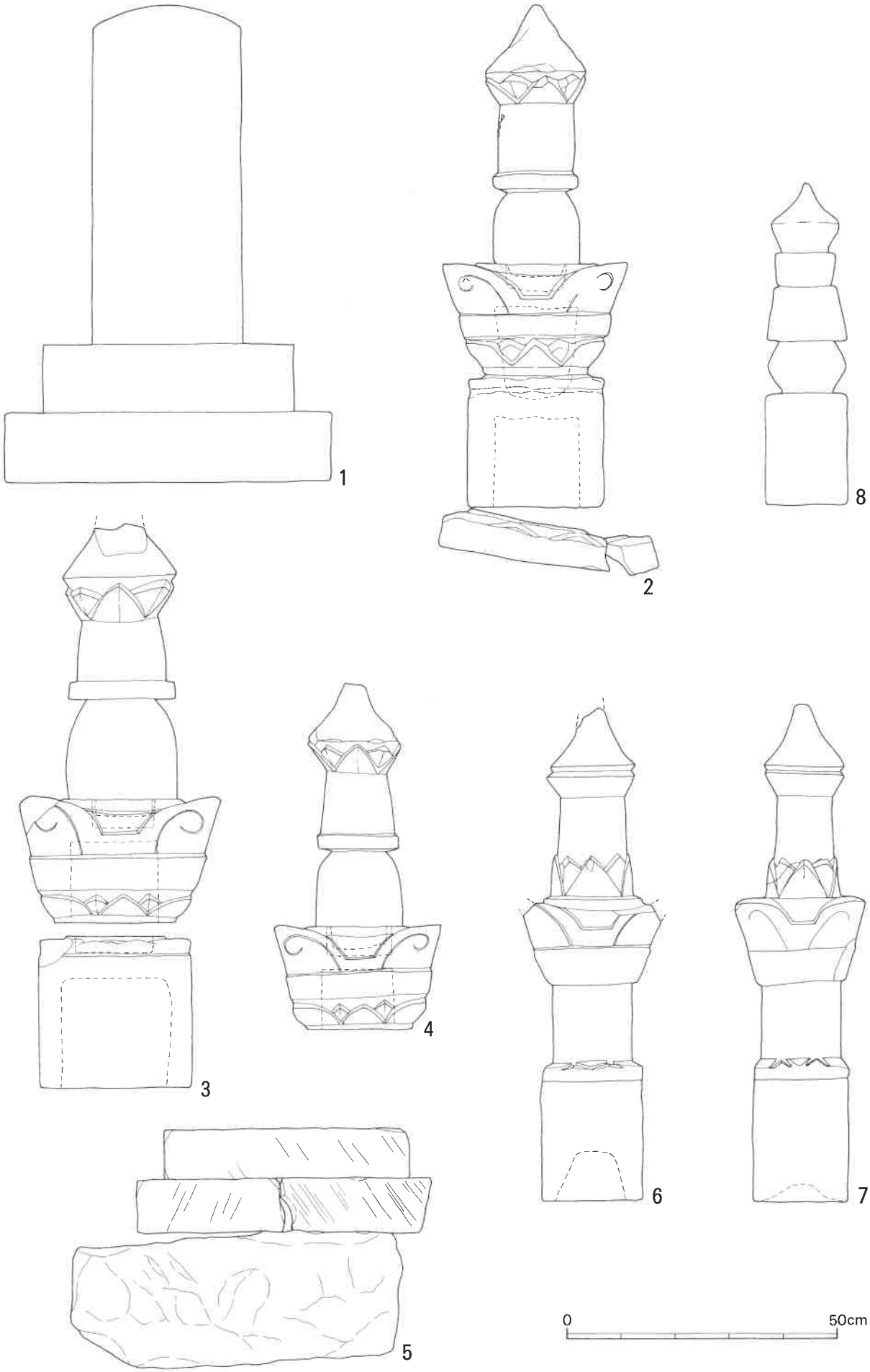
以上のように、安原谷奥部に造立された石造物には多様なものが存在することが確認された。銘文等から確実に安原備中のものと判断できるものは認められなかったが、いずれにしても１などから19世紀前半代にはこれらが安原備中に関わる墓石として認識されていたものと考えられる。

参考文献

島根県教育委員会2007『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ―安原備中関連史料集―』



第18図　安原備中墓位置図



第19図　安原備中墓所在の石造物

第５章　大光寺墓地の宝篋印塔群

１．調査地の概要

本報告の石塔群は出雲地方南西端、飯石郡飯南町上赤名向谷の、大光寺裏手にある墓地に所在する。近くには赤穴八幡宮があり、神戸川・国道54号を挟んで谷向かいには赤穴氏の居城である瀬戸山城跡が位置している[1]。大光寺は、赤名の中心部にある曹洞宗明窓院の末寺とされ、小規模な寺堂が建つ。石塔群はその背後の緩斜面地にあり、一石および組み合わせ式の宝篋印塔が10数基確認できる。調査は平成14年３月に行い、鳥谷芳雄、岩谷和樹、湯川登の３名で実測した。

２．石塔群の概要

石塔はいずれも宝篋印塔であり、一石のものと組み合わせ式のものとの２種類が確認できる。

一石のものは３基あり（19～21）、いずれも石見銀山に通有の形式のものである。完形品が１基で、残る２基は上方の九輪部を欠いている。完形品は相輪部無段で下端に請花を表し、宝珠部は算盤玉状につくり、稜線の部分で凹線が巡る。笠部の四隅は外傾し、隅飾りは沈線で蕨手状の巻きが入る。基礎部に紀年銘を有しているが、風化のため読み取れない。

組み合わせのものは、石見銀山に特徴的なもの（１～16）と出雲地方に特徴的なもの（22～24）、２系統が認められる。前者は損壊が進んだり散在したりして、全部位が揃ったものはない。しかし、相輪が７点、笠が５点、塔身が１点、基礎が６点認められるので、基数としてはおそらく６基程度あったと推定される。一方、後者は３基あって各部位を保っている。

前者の基礎は、上部に平板な間弁付きの八弁（素弁）反花座をつくる。底部は内刳りのあるものとないものとがある。塔身は１個体分のみ、それも部分として確認した。笠は隅飾りが傾斜し、１弧で左右に蕨手状の沈線を巻く。段の下は間弁付き八弁（素弁）の蓮華座を表したものとそうでないものがある。中には軒口四方に「来」の文字を刻んだものがある。相輪は九輪を全く刻まないのが特徴であり、下から上に向かって伏鉢、突帯、素面九輪、間弁付きの蓮弁（素弁）宝珠となる。九輪は長いものと短いものがある。

基礎の１点（11）に「（正面）祥隆院殿、（右側面）三善憲清廟、（左側面）延宝七己未八月五、（裏面）敬白」と銘を入れたものが認められる。

後者は、大型のものと小型のものがあるが、小型のものは約25mほど群とは離れて単独で存在する。

大型の２基はほぼ同じ形式のものである。違いを求めるとすれば、笠部で隅飾りの両端を結ぶラインが中央付近で深くなるものとそうでないものに分かれる。いずれも表面の風化が進み、銘文は不明である。小型のものはこの２基に比べると、九輪部の段形や隅飾りを比較的丁寧に刻んでいる。隅飾りの内側の線は２弧風になり、その変節点の下側に小さな弧状の眉を入れる。また、隅飾りの傾斜もあまり大きくなく、全体として安定感のある縦横比となっている。

石材は、石見銀山遺跡に通有のものは福光石であり、出雲地方に通有のものは来待石である。

３．造立の年代と関係者

石見銀山に通有のものには、延宝７年（1679）の紀年銘が入ったものがあり、造立年代が判明する貴重な例である。これを踏まえつつ、他の一石のものや組み合わせのものの形式をみると、明確に16世紀代と言えるものはなく、おおよそ17世紀前半から半ばにかけて製作・造立されたと考えられる。

一方、出雲地方に通有のものは、形式的にみると22→24→23と変遷したと推察される。小型のものに似てしかも紀年銘のある例には、松江市宍

道町来待の、文禄５年（1596）在銘の岩屋寺１号窟４がある[2]。これとの比較では、笠隅飾りの内側曲線などにこれより古い要素がみられることから、時期も幾らか遡っておよそ16世紀後半のものではないかと推定する。また、大型のもの２基はこれより後出し、およそ16世紀末から17世紀初頭にかけてのものとみられる。

これらの石塔群については、当地では瀬戸山城主であった赤穴氏累代の墓塔とされている[3]。出雲地方に通有の組み合わせ宝篋印塔３基は、おそらくこれに関係した石塔と考えられる。また、石見銀山に通有の一石および組み合わせの宝篋印塔も、うち１基に三善姓を刻んだものが確認できることから、これらも赤穴氏一族に関係した石塔ではないかと推定される。

４．石塔群の特色と造立背景

既述のように、本石塔群は宝篋印塔のみで構成されていて、造立年代はおおよそ16世紀後半から17世紀半ばぐらいまでと推定される。この石塔群で最も特徴的なのは、出雲地方に通有なものと石見銀山に通有なもの、大きく２系統の宝篋印塔があることである。この２系統のものは同時に存在したのではなく、およそ1600年ごろを境にして前者から後者へ石塔形式が移行したものと推定される。

石見銀山で通有のものは福光石で製作されたものであり、この種の一石および組み合わせ式の宝篋印塔の分布例が、出雲地方において１つ加わったことになる[4]。石見銀山を中心にした福光石製の石塔文化の広がりを知る上で貴重な資料と言えるが、この地点に分布する背景を考えると、石見銀山産の銀が慶長年間から当地を経由して尾道ルートで輸送されることになったことと無関係ではないように推察する。

なお、この調査によって飯南地区における出雲地方特有の組合せ式の宝篋印塔が図化されたことも特記しておきたいと思う。（鳥谷芳雄）

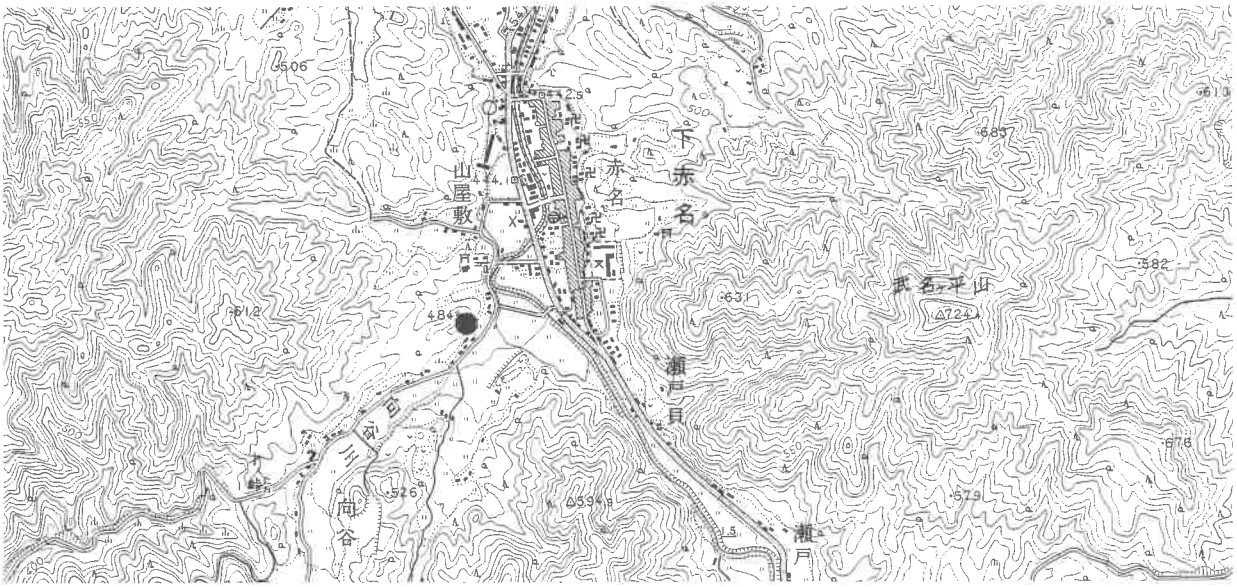
（註）

(1)　『赤来町史』赤来町史編纂委員会1972。『角川日本地名大辞典32　島根県』角川書店1979

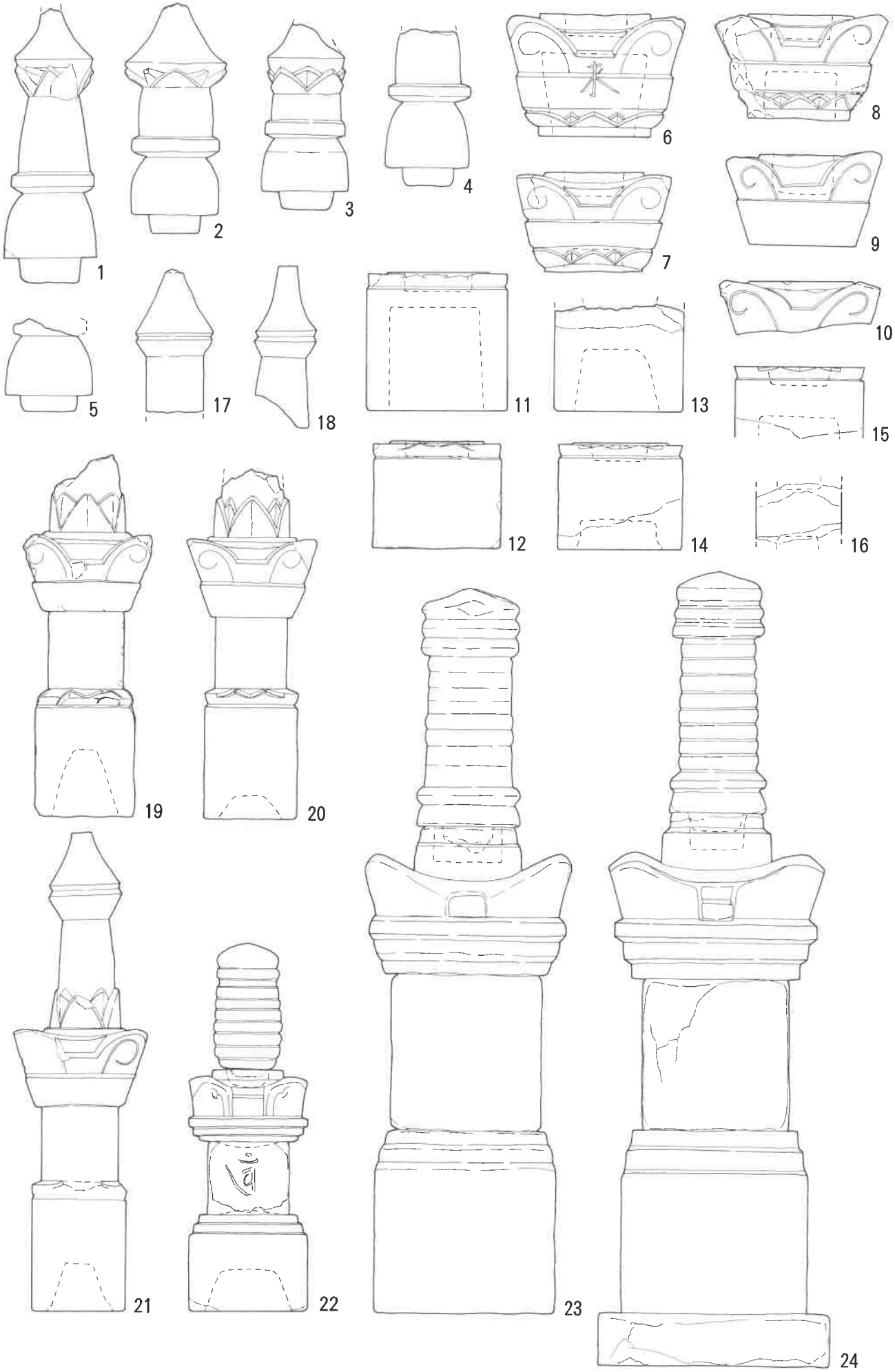
(2)　間野大丞他『岩屋寺石造物調査報告』来待ストーンミュージアム2008

(3)　前掲註(1)に同じ。現地には赤穴氏累代の墓地であることを示す標柱が立てられている。

(4)　拙稿「大社町神光寺旧跡出土の一石宝篋印塔」『石見銀山遺跡ニュースNo.１』島根県教委他2001



第20図　飯石郡飯南町・大光寺墓地位置図（Ｓ＝1/50,000）



第21図　大光寺墓地の宝篋印塔群実測図（S＝1/10）

挿図番号	所在	種別	全高	全幅	墓標幅	梵字	銘文	備考	西暦
21-1	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-2	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-3	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-4	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-5	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-6	大光寺	組合せ宝篋印塔						笠	
21-7	大光寺	組合せ宝篋印塔						笠	
21-8	大光寺	組合せ宝篋印塔						笠	
21-9	大光寺	組合せ宝篋印塔						笠	
21-10	大光寺	組合せ宝篋印塔						笠	
21-11	大光寺	組合せ宝篋印塔					（正面）祥隆院殿　（右面）三善憲清廟 （左面）延宝七己未八月五　（裏面）敬白	基礎	1679
21-12	大光寺	組合せ宝篋印塔						基礎	
21-13	大光寺	組合せ宝篋印塔						基礎	
21-14	大光寺	組合せ宝篋印塔						基礎	
21-15	大光寺	組合せ宝篋印塔						基礎	
21-16	大光寺	組合せ宝篋印塔						塔身	
21-17	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-18	大光寺	組合せ宝篋印塔						相輪	
21-19	大光寺	一石宝篋印塔							
21-20	大光寺	一石宝篋印塔							
21-21	大光寺	一石宝篋印塔							
21-22	大光寺	組合せ宝篋印塔						出雲特有	
21-23	大光寺	組合せ宝篋印塔						出雲特有	
21-24	大光寺	組合せ宝篋印塔						出雲特有	

凡　例

- 西念寺に存在する石造物のうち、群番号５、20墓地所在の石造物（以前報告したものを除く）及び益田屋墓所のものを掲載した。
- 各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を残存高または各部材毎の高さで掲載した。
- 銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は［　］で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は　］（上欠）、［　（下欠）と示した。また推定できる文字は□内に入れて表示した。
- 戒名及び名字は○○○とした。
- 掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
- 写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

16-5	16-4	16-3	16-2	16-1	15-7	15-6	15-5
益田屋-11	益田屋-14	益田屋-10	益田屋-9	益田屋-8	益田屋-7	益田屋-6	益田屋-5
突頂方柱墓標	円頂方形墓標	灯籠	灯籠	円頂方柱墓標	石仏	石仏	石仏
46	156	133	137	100	95.5	99	93.5
20	36	46	52	44	39	33	36
				21			
	キリーク						
(正面)○○○○善童女 (右面)大正三年 一月廿四日	(正面)南無阿弥[陀佛] (右面)信心施主萩村七ッ原三代目 維時明和五戊子天　因名○○氏文左「」 二月大善日　界名○譽○信士 (左面)為　先祖代々　菩提也　龍燈山第「」 三界萬霊			(正面)○○院○譽○○大姉 ○○院釋○○居士 (台座)天文二丁巳天 「」 十一月十八日		(正面)○○院 松譽○○○居士 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○居士 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○居士 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉	○○院 ○譽○○○居士 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○居士 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○居士
1914	1768			1737			

19-8	19-7	19-6	19-5	19-4	19-3	19-2	19-1	16-11	16-10	16-9	16-8	16-7	16-6
安原8	安原7	安原6	安原5	安原4	安原3	安原2	安原1	益田屋-17	益田屋-16	益田屋-15	益田屋-13	益田屋-18	益田屋-12
一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	宝篋印塔台座	組合宝篋印塔	組合宝篋印塔	組合宝篋印塔	円頂方形墓標	円頂方形墓標	突頂方柱墓標	円頂方形墓標	突頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
59	91	90	42	63	101	99	87	53	92.5	54	63	65	37
15	24.5	25.5	60.5	31	37	34	60	33	50	33	34	32.5	16
							27.5		22			21	
	あり						あり					キリーク	
(正面)元禄四年 □□童女 正八月廿九日		寛文四甲辰 經知清三 七月三十六日 (相輪)妙法 (笠)蓮 (塔身)華		笠上面に「一」の印刻あり		四面梵字あり	(右面)元和九癸亥年八月五日 (正面)来迎院紫閻浄雲 (左面)安原備中知禅定門 (裏面)萬延元庚申年秋再建之銀山忠功種墓	(正面)○○○○○○ ○譽○○○○ ○譽○○○○ ○○○○○○ (右面)○○○○○○ 安政六未六月廿五日俗名コト 元治元子十一月廿五日俗名治八 ○譽○○○信□	(正面)○○譽○○○大姉 ○善童女 (右面)明治九年十二月六日 ○緑音 (左)大森町○スエ丁四十才 明治九年四月十一日 同人娘	(正面)○○○○○○ 先祖代々 (右面)明治三年○○○○○○ 九月日○譽○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○ ○○屋□□□ェ	(正面)明治四十三年九月廿一日□ ○譽○○信士　行年五十六才丈七丁 スギノ父	(正面)○□信女 (右面)享和元酉年 (左面)二月十五日 施主又三郎	(正面)○○孩児 (右面)昭和廿三年九月五日亡 (左面)俗名恵子 行年一才 ○○孝幸長女
	相輪の途中で折れる	相輪・笠の一部が欠損		相輪、笠のみ	塔身なし	塔身なし							
1691		1664					1623 1860	1859・1864	1876	1870	1910	1801	1958

13-10	13-9	13-8	13-7	13-6	13-5	13-4	13-3	13-2	13-1	12-9	12-8	12-7
群5-27	群5-32	群5-31	群5-30	群5-33	群5-25	群5-26	群5-24	群5-23	群5-22	群5-3	群5-19	群5-6
円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	無縫塔	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	尖頂六角柱形墓標	突頂方柱墓標	円頂方柱墓標
65.5	56	37.5	89.5	30	21.5	17.5	30	19	19	121	109	77
27.5	28.5	21	49.5	14	26.5	19.25	21.5	29	29	87	62	42.5
20.5	23		27.5							25	24.5	19.5
キリーク			キリーク							キリーク	キリーク	
(正面)□譽○○信士 (右面)信心施主 ○○吉左衛門 宝永二巳九月十六日 (左面)但馬國瀬戸野間 屋○氏四良左衛門 戌年五十二才	(正面)[ ]	(正面)[ ] (右面)宝暦五年四月廿九日 (左面)俗名 ○○屋 □□金右門 行年四十五才	(正面)林譽寶心法[子] (台座) (正面)[天明]六[丙]年 三月十日 (左側)施主中村屋 庄兵衛			4面に円形輪郭のみ	蓮			(右面)大正十四年六月 (正面)古墳聚霊之塔 (左面)西念寺 念譽上人建之	(右面)[ ] (正面)○○童女 ○○○○信女 ○○○童女 ○○藤市娘ヲキチ刀 明治三十四年丑一月九日 ○○藤市娘 俗名トセ四才	(右面)安永五年 (正面)申七月日 建之 (左面)三界萬霊 耀譽
				水・地輪のみ	基礎のみ	塔身のみ	笠のみ	笠のみ	笠のみ			
1705		1755	1786							1925	1901	1776

15-4	15-3	15-2	15-1	13-13	13-12	13-11
益田屋-4	益田屋-3	益田屋-2	益田屋-1	群5-21	群5-29	群5-28
石仏	石仏	石仏	石仏	尖頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
115	94.5	94.5	93.5	91	50.5	92.5
41	34	35.5	35	42.5	35	49
				30	15.6	25
(正面)○○院○譽○○○○居士 (右面)○○院○譽○○○○大姉 長劔萩家中○○上藤兵衛高秀 行年八十四才 同妻行年六十二才 當家元祖 ○○藤右ェ門高啓 両親也 (左面)大元禄十丁巳六年七日 蓮正徳二壬辰十一月十日	(正面)○○童女 ○○童子 ○○童女 ○○童子 ○○○○信士 ○○○○大姉 ○○譽○○○大姉 ○○院 ○譽○○○大姉	(正面)○○善童女 ○○孩子 ○譽 ○○○○信士 ○○○○童女 ○○○○童子 ○○童女 ○○童子	(正面)○○孩女 ○○善○童子 ○○善童女 ○○院○譽○○○○大姉 ○○院○譽○○○○居士 ○○善童子 ○○善童女	(正面)元禄十三年 ○○○信士 □□○○信士 □洲 俗名[ ] 享保□	(正面)釈尼○○ (右面)明治四十四年 三月廿十四日 (左面)○○斗作姉 俗名トワ年廿四才	(正面)先祖代々之墓 (右面)釋○○ (左面)天保九年戌二月廿二日 俗名良兵ェ刀 ○○リョ建之
				花崗岩		
				1700	1911	1838

11-3	11-4	11-5	11-6	11-7	11-8	11-9	11-10	11-11	11-12	11-13
群5-4	群5-2	群5-7	群5-18	群5-5	群5-8	群5-16	群5-36	群5-11	群5-13	群5-12
一石五輪塔	一石五輪塔	無縫塔	無縫塔	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
29	52.8	58	71	43	36	40	36	53.8	72.5	62
14	21	23	23	27.5	18	19	18	26	45	52.25
				19					20	
								キリーク		
		(正面) 南無阿弥陀佛	(右面) 文久三癸亥年 (正面) 眞譽良道法子 (左面) 五月初四日 (裏面) 當山十九主博譽造立	(右面) 明治廿九年八月二日 (正面) ○○童女 (左面) ○○政太郎長女 俗名マサヨ冂二才	(右面) 明治三十八年 四月十五日 (正面) 釈尼○○ (左面) ○○亀太郎子 ヤスノ冂年一才	(右面) 八月廿七日 (正面) ○○童子 (左面) 文化四丁卯	(右面) 十一月九日 「 」 (正面) ○○童女 (左面) 寛政九巳	(右面) 明治十八西年八月廿日 ○○清九郎冂四十五才 (正面) ○譽○○信士 (左面) 明治廿二年丑年五月廿九日 仝人妻夕子冂四十六才	(正面) □□○□信□ (左面) 安永五申天 九月廿六日	(正面) ○譽○○信士 ○○童女 ○譽○○信女 ○○童女 ○譽○○信士 ○○童子 ○譽○○信女 ○○童子 ○譽○○信士 ○○童子 ○譽○○信女 ○○童子 ○譽○○信士 ○○童女 ○譽○○信女 (左面) ○○屋 勝四郎立之
火地輪欠 損	空風輪欠 損	頂部欠損								
			1863	1896	1905	1807	1797	1885	1776	

11-14	11-15	12-1	12-2	12-3	12-4	12-5	12-6
群5-9	群5-14	群5-37	群5-10	群5-17	群5-15	群5-34	群5-20
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
48	41	70.5	50.5	64.5	44	48.5	83
21	28.4	31.5	24.5	35	17.5	40	46
		21		17		19	24.5
		キリーク		カ	カ		□
(右面) 明治三十一年 四月廿八日 俗名○○丈太郎 行年三十八才 (正面) 釋○○		(正面) ○□信女 (右側) 享和元酉年 (左側) 二月十五日 施主又三郎	(右面) 明治廿四年四月一日 ○○喜次郎妻 俗名チエ年五十三 (正面) 釋 ○○ ○○ (左面) 明治廿九年九月十七日 ○○喜次郎 二男 俗名熊市十六才	(右面) 天明三□ 十二月廿九日 (正面) ○□童女 (左面) 施主 □屋	(右面) 寛政□卯 十一月六日 (正面) ○○童女 (左面) 施主 □屋	(正面) ○○○○信士 ○○○○信女 (左面) 明治廿八年九月廿一日 ミツ冂 (右面) 明治廿三年一月八日 ○○桂四郎冂 増市父母	(右面) 明治廿五年辰一月三日 □文四郎叟 年七十二才 (正面) □○○○信士 □□○□信女 (左側) □
1898		1801	1896	1783	1795	1895	1892

挿図番号	整理番号	種別	全高	最大幅	墓標幅	梵字	銘文	備考	西暦
9-1	群5-Ⅴ-1	円頂方形墓標	56	33	21.5		(左面)○○昌[ ]	下部埋没	
8-8	群5-Ⅲ	蝋燭立て					陶器		
8-7	群5-Ⅱ-7	蝋燭立て	34	24.6					
8-6	群5-Ⅱ-6	花立	24.5	13					
8-5	群5-Ⅱ-5	線香立	24	34					
8-4	群5-Ⅱ-4	花立	24.5	13					
8-3	群5-Ⅱ-3	円頂方形墓標	81	67	30		(正面)○○信女 ○○○○信士 ○□信女 ○○○○信士 ○○○○信女 ○○童子 ○○童女 ○○○○信士 (左面)安政四丙巳□月調之 三代目 ○○新十立		1857
8-2	群5-Ⅱ-2	円頂方形墓標	80	60	44.5		(正面)○○信士 ○○童女 ○○童子 ○□信女 ○○童子 ○○童女 ○○信士 ○○童子 ○○信女 ○○童女 ○○童子 ○○孩女 ○○童子		
8-1	群5-Ⅱ-1	円頂方形墓標	80	47.5	30		(正面)○○○○信士 明治廿九年十二月廿三日 寛治郎了十六年十一ヶ月 ○譽○○信士 明治三十六年十一月三日 藤太郎了五十才 ○○タヨ父 ○譽○○信女 京了 ○譽○○信女 トメ了		1896 1903
9-2	群5-Ⅴ-2	円頂方柱墓標	50	38	22		(正面)○□童子 (右面)矢[ ] (左面)○○弥市[ ]	下部埋没	
9-3	群5-Ⅴ-3-1	石仏	36	28			(正面)○○童女 天明[ ] 六月二日○○□市□ 娘		
9-4	群5-Ⅴ-3-2	石仏	24	31	24			下部埋没	
9-5	群5-Ⅴ-5	石仏	35.5	36	20			下部埋没	
9-6	群5-Ⅴ-4	石仏	45.5	30			(正面)○○屋[ ]娘その 六才		
9-7	群5-Ⅴ-6	石仏	30	47.5	31		(正面)[ ]廿二才		
9-8	群5-Ⅴ-8	石仏	45	30			(正面)□□□童女 三月廿八日 俗名ヲタミ 生年二才		
9-9	群5-Ⅴ-7	石仏	16	6.9				頭部のみ	
9-10	群5-Ⅴ-9	石仏	29	20			(正面)○○童子 (後面)寛延三庚 ○○○○		1750
10-1	群5-Ⅳ-1	石仏	47	30.2			(正面)[ ] 津[ ] 泉屋□ [ ]		
10-2	群5-Ⅳ-2	石仏	24.6	21.4					
10-3	群5-Ⅳ-3	石仏	25	20					
10-4	群5-Ⅳ-4	石仏	16	25.2				風化著しい	
10-5	群5-Ⅳ-5	石仏	17.4	26				風化著しい	
10-6	群5-Ⅳ-6	石仏	17.4	22.4					
11-1	群5-1	組合せ宝篋印塔	51.5	34				笠・基礎のみ	
11-2	群5-35	組合せ宝篋印塔	26.5	25.6				基礎のみ	

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	西念寺墓地（３）・安原備中墓・大光寺墓地		
巻次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	9		
編執筆者	田中　義昭・池上　　悟・鳥谷　芳雄・長嶺　康典・新川　　隆 守岡　正司・田原　淳史・中木紗友美		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502　島根県松江市殿町１番地　　TEL０８５２－２２－５６４２ 〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL０８５４－８２－１６００		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	２００９年３月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
所収遺跡名	所在地	主な時代	石造物
西念寺墓地	大田市 温泉津町	江戸 ～ 近代	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・組合五輪塔・無縫塔・円頂方形墓標・円頂方柱墓標・突頂方柱墓標・平頂方形墓標・笠付方形墓標・石殿・地蔵・陶製墓標
安原備中墓	大田市 大森町	江戸	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・円頂方形墓標
大光寺墓地	飯石郡 飯南町	戦国～江戸	一石宝篋印塔・組合宝篋印塔

石見銀山
西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地

平成21（2009）年3月

編　集　島根県教育委員会・大田市教育委員会
松江市殿町1番地　大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL　http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印　刷　松栄印刷有限会社